

滝電

1994. 4 No. 15

目 次

会長ご挨拶（成松啓二）	1	講座紹介	24
滝電会役員	2	母校のニュース	26
滝電会だより	4	教室情報	28
話題	13	会員の方々のご活躍	30
退官された先生方の近況	17	同窓会だより	32
卒業生の近況	18	卒業者氏名（就職先）	36
留学生の声	22	入学者氏名（出身校）	38

平成 6 年度 澄電会総会・懇親会ご案内

平成 6 年 4 月

澄電会会长 成松 啓二

拝啓 陽春の候、会員の皆様にはご健勝で益々ご活躍の事とお慶び申し上げます。

さて、平成 6 年度 澄電会総会ならびに懇親会を下記のとおり開催致します。昨年は 200 名を越える卒業生や先生方が出席され大盛況でした。大学の先生方を交えて先輩、後輩、同期生の方々が一堂に会して旧交を温めつつ情報交換を行う絶好の機会でございます。また、総会・懇親会に合わせて日頃ご無沙汰の同期会を企画するのもよろしいかと存じます。現在、各方面でご活躍中の皆様方の原点は母校・阪大電気系であることを思い起こして頂き、お誘い合わせの上多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。

敬具

―― 記 ――

日 時： 平成 6 年 6 月 3 日（金） 午後 6 時～9 時

場 所： 大阪梅田・新阪急ホテル（大阪市北区芝田 1-1-35 ☎:06-372-5101）

次 第： 1. 総 会 午後 6 時～6 時 30 分 「花の間」

2. スピーチ 午後 6 時 30 分～7 時 「花の間」

『ネットワーキングと超並列処理』

大阪大学 情報システム工学科 教授 寺田浩詔先生

3. 懇親会 午後 7 時～9 時 「紫の間」

会 費： 学部卒業昭和 60 年以降の方 5,000 円

〃 以前の方 10,000 円

会費は当日申し受けます。懇親会のみのご参加も歓迎致します。

準備の都合上、出欠のご返事を同封のハガキにて来る 5 月 20 日（金）までにお知らせください。

会長ごあいさつ

員会会長



澤電会会長 成松 啓二
(電気・昭和 25)

一昨年この伝統ある澤電会会長の大役を仰せつかり、会員ならびに役員の皆様のご協力を頂ながら、澤電会発展のため微力を尽くして参りました。皆様のご協力に対してこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

この間、関係各位のご努力により九州、四国、中国各支部が設立され、東京、名古屋、北陸各支部とあわせて6カ所の支部で、各地域ごとに支部総会が開かれるなど、活発な活動が展開されております。

今後、本部のみならず各支部の活動を基盤として、澤電会のますますの発展が期待できるものと心強く感じている次第であります。

さて、ご承知のとおり、昨年8月八党派による細川連立内閣が誕生し、わが国政治における歴史的に新たな一ページが開かれようとしております。新政権の下、政治改革問題は一応の決着をみたものの、未だ、新たな政治体制が落ちつくまでの過渡期であり、内外とも課題が山積している中で政治の不安定感は否めないところと思います。

一方経済は、バブル崩壊に始まり戦後最長の不況という厳しい事態に直面しており、これまでのような景気浮揚策を施しても効果のない状況になってきております。このような中、産業界においては、生き残りをかけ、きびしい事業のリエンジニアリングが進められております。

また、景気問題と同時に雇用問題も危惧されております。顕在化している失業者、就職難に加え、企業内失業者が増えてきており、さらに不況が長期化すると企業は持ちこたえられず、大きな社会問題になる恐れがあります。政府も企業も抜本的な対策を打ち、新たな雇用創出が必要になってくると思ひ

ます。

このように政治・経済情勢が厳しい中、わが国の国民性からか、不況一色となって経済全体が縮小均衡に陥ってしまう傾向がみられますが、「病は氣から、景気も氣から」と言われているように、このような時代にこそ、将来に向けて明るい希望を抱き、技術革新への再挑戦などチャレンジ精神の發揮が求められているものと思います。

幸いにも、我ら母校のある関西地域では、ビッグプロジェクトが目白押しであります。産・学・官が総力を結集して建設を進めている「関西文化学術研究都市」(けいはんな)では、B-1SDNの利用研究・実験が行われ、また、本年9月には“まちびらき”を挙行し、21世紀に向けた創造的かつ国際的、実際的な文化・学術・研究の拠点としての位置付けをアピールする予定であります。一方、国際化時代に対応した交通拠点として、日本初の24時間空港である「関西国際空港」も、いよいよ本年9月に開港いたします。さらに、「平安建都1200年」記念事業や、和歌山マリーナシティを舞台に「世界リゾート博」が開催されるなど、平成6年は関西が大きく飛躍する年であります。

このように明るい展望の中で、産学官横断した組織である私ども澤電会は、社会の動き、世界の情勢にも目を向け、広い視野の下で自ら何が出来るのか、何をなすべきかを考え、当会の真価を發揮すべく大いに努めてまいりたいものであります。

最後になりましたが、澤電会会員各位のご健勝、ご活躍とご多幸を祈念いたしまして私のご挨拶にさせていただきます。

電気会員

平成五年度電気会本部および支部役員としてご尽力頂いた方々は下記のとおりです。(○印は本年度新たに就任された役員、敬称略)

また、電気会支部として東京、名古屋、北陸、四国、九州支部が活動を行なっていますが、電気会よりありますように新たに中国支部が設立されました。役員氏名の他に、本部および各支部の連絡先を付記してありますのでご用の節はお気軽にご連絡下さい。

[本 部]

会長

成松 啓二(電気・昭25) 関電興業(株)

副会長

○桜井 良文(電気・昭18) 大阪工業大学

倉岡 澄(電気・昭22) 東海コンクリート
工業(株)

小島 卓哉(通信・昭22) 芝浦工業大学

岩澤 宏(通信・昭26) 福井大学名誉教授

○河村 寿三(電気・昭29) 福岡工業大学

○山下 一彦(電気・昭31) 四国電力(株)

○村上 吉繁(電気・昭30) 阪大・超伝導

幹事

○長谷川 晃(通信・昭32) 阪大・通信

浅川 順繁(通信・昭37) (株)東芝

白川 功(電子・昭38) 阪大・情報システム

○井沢 靖和(電気・昭39) 阪大・レーザー

吉野 勝美(電気・昭39) 阪大・電子

○塩沢 俊之(通信・昭39) 阪大・通信

佐々木孝敏(電子・昭40) 富士通(株)

野依 正晴(電子・昭40) 松下電産(株)

○辻 穀一郎(電気・昭41) 阪大・電気

○中尾 靖之(電気・昭41) オムロン(株)

鷹岡 昭夫(電子・昭41) 阪大・電子

土井 四郎(電気・昭42) 三菱電機(株)

玉川 允敏(通信・昭43) (株)日立製作所

○鷲野 翔一(電子・昭43) 三菱電機(株)

○浜本 和夫(電子・昭44) 関西電力(株)

○西邑 省三(電子・昭45) 日本電信電話(株)

- 村上 恒美(電子・昭45) 日本電信電話(株)
薦田 憲久(電気・昭47) 阪大・情報システム
○杉野 隆(電気・昭47) 阪大・電気
四方洋一郎(通信・昭47) 日本電気(株)
 笹谷 幸裕(電子・昭47) 住友電気工業(株)
○〆木 泰治(電子・昭47) 松下電産(株)
 富田 義数(通信・昭48) 三洋電機(株)
○田中 和浩(電気・昭49) (株)ダイヘン
○藤田 尚徳(電気・昭49) 阪大・レーザー
○山崎 幸郎(通信・昭49) 関西電力(株)
○山口 則正(通信・昭50) シャープ(株)
○川村 憲司(通信・昭51) 住友電気工業(株)
 鬼頭 淳悟(通信・昭51) シャープ(株)
○清瀬 功(電気・昭52) 三洋電機(株)

連絡先: 〒565 吹田市山田丘2-1
大阪大学工学部電気系内
電気会事務局 安井晴子

TEL 06-877-5111 内線4599 FAX 06-875-0506

[東京支部]

支部長

小島 卓哉（通信・昭 22）芝浦工業大学

総会幹事団体 沖電気工業株

幹事団体代表

須藤 悅次（通信・昭 36）沖電気工業株

取締役 通信ネットワーク事業本部

副事業本部長

幹 事

矢後 嘉信（通信・昭 40）沖電気工業株

連絡先：〒108 東京都港区芝浦 4-10-16

沖電気工業株 通信ネットワーク事業本部

加入者伝送技術部第2課

大西一三（電子・昭 61）

TEL 03-3454-2111 ext 5670

FAX 03-3798-7792

[名古屋支部]

支部長

倉岡 一澄（電気・昭 22）東海コンクリート

工業株

幹 事

松本 圭二（電気・昭 41）三菱電機株
FAシステム部

連絡先：〒455 名古屋市港区潮風町 10 号地

東海コンクリート工業株相談役 倉岡 澄

TEL 052-381-2726 FAX 052-384-5254

[北陸支部]

支部長

岩澤 宏（通信・昭 26）福井大学名誉教授

庶務幹事

浅田 勝彦（電子・昭 38）福井大学

連絡先：〒910 福井市文京 3-9-1

福井大学工学部情報工学科 浅田勝彦

TEL 0776-27-8577 FAX 0776-27-8751

[九州支部]

支部長

河村 寿三（電気・昭 29）福岡工業大学

幹 事

金藤 敬一（電気・昭 46）九州工业大学

連絡先：〒820 飯塚市大字川津 680-4

九州工业大学情報工学部電子情報工学科

金藤敬一

TEL 0948-29-7664 ext 303

FAX 0948-29-7651

[四国支部]

支部長

山下 一彦（電気・昭 31）四国電力株

幹 事

坂本 明雄（電子・昭 46）徳島大学

連絡先：〒770 徳島市南常三島町 2-1

徳島大学工学部電気電子工学科 坂本 明雄

TEL 0886-23-2311 ext 4612

FAX 0886-54-9632

sakamoto@ee.tokushima-u.ac.jp

[中国支部]

支部長

三上 彦三（電気・昭 23）中電工業株

幹 事

坂本 昭彦（電気・昭 42）近畿大学

連絡先：〒729-17 東広島市高屋うめの辺 1 番

近畿大学工学部電子情報工学科 坂本昭彦

TEL 0824-34-7000 ext 640

FAX 0824-34-7011

電気会だより

平成5年度総会・懇親会

本年は213名の参加者を得て、平成5年6月4日(金)午後6時より梅田・新阪急ホテルで開催された。総会は佐々木孝友幹事(電機・昭42)の司会で進行した。成松啓二会長(電気・昭25)の会長挨拶に続いて、松浦慶士総務幹事(電気・昭35)から平成4年度事業報告がなされ、併せて、九州ならびに四国支部において設立総会が開催されたことが報告された。また、吉野勝美会計幹事(電気・昭39)より平成4年度決算報告があり、承認された。

続いて、成松会長から、桜井良文(電気・昭18・次期会長予定)、村上吉繁(電気・昭30・阪大在職)、川村寿三(電気・昭29・九州支部長)、山下一彦(電気・昭31・四国支部長)新副会長をはじめ20名の新任役員が紹介され、拍手でもって承認された。この後、吉野新総務幹事から平成5年度事業計画が、辻毅一郎新会計幹事(電気・昭41)より同予算案の説明があり、共に承認された。

総会に続いて、電子工学科の児玉慎三教授により、恒例のスピーチが行われた。『システム理論の楽しみ』と題して、先生のご研究の一端を紹介くださいました。なかでも、制御理論におけるカオスを分かりやすくご説明頂いたのが印象的であった。

懇親会は会場を移して午後7時より松浦幹事の司



会で開かれた。成松会長の挨拶の後、熊谷信昭前大阪大学総長(通信・昭28旧)、岩澤宏北陸支部長(通信・昭26)からご祝辞を頂いた。祝電披露の後、山口次郎元電気会会長(電気・大15/昭7)の音頭で乾杯が行われ、立食パーティに入った。1時間余りの歓談の後、桜井新副会長のご発声で万歳三唱を行い、盛況の内に解散となった。

(鷹岡昭夫(電子・昭41)記)

京大・阪大電気系スポーツ大会

第36回(平成5年度)京大・阪大電気系交歓スポーツ大会(通称京大戦)は、京大が幹事校となり、平成5年7月19日(月)に、関西電力株式会社無瀬体育施設で行われました。今年は、京大のカリキュラム変更に伴い例年に比べ1週間程度遅く開催されたことが結果的には幸運で、当日はそれまで続いていた長雨もうそのように晴上り、強い日差が照りつける中、阪大側72名を含め両校合わせ約150人が集い、同大会が行われました。

京大側を代表した小倉教授による歓迎のご挨拶の後、阪大側を代表して平木昭夫教授が挨拶され、各種目の優勝杯返還の後、各会場に別れ、例年通り以下の5種目の熱戦が展開されました。本年は、各種目とも接戦となりましたが、いずれも惜敗し残念な



[戦績]	阪大	-	京大
野球	×	7 - 7	○
ソフトボール	×	6 - 7	○
テニス	×	3 - 6	○
バレーボール	×	0 - 2	○
卓球	×	5 - 8	○
総合成績	0	-	5

がら優勝杯を持って帰ることができませんでした。

スポーツ大会終了後、午後4時30より6時まで上記施設内の食堂で懇親会が盛大に行われました。

京大の奥村教授の開会の辞に続いて、平木教授の音頭で乾杯し、本大会の成績報告および勝利監督への優勝杯授与があり、恒例の両校競技監督によるスピーチが行われました。活躍した選手の紹介や祝杯等、終始和やかな雰囲気の中で会は進行し、最後に次年度幹事校となる阪大を代表して、倉薗貞夫教授から捲土重来を誓うご挨拶があり、京大の藤田教授の閉会の辞にて散会となりました。

なお、溝電会より10万円のご寄付を頂き、本大会の阪大側運営が非常に容易になりましたことを申し添え、ここに厚く御礼申し上げます。京大側では大会運営のためOBへの寄付依頼等ご苦労されていることですので、改めて感謝申し上げます。

(伊藤利道(電気・昭50)記)

平成5年度見学会

平成5年度溝電会見学会は54名の参加を得て、10月29日(金)に開催された。見学先は関西電力(株)南港発電所と関西新空港である。当日は天候もまことに、午前8時45分ホテル阪神駐車場に集合。出発には成松会長が駆けつけ、挨拶された。

阪神高速道路を南港北ランプでおり、かもめ大橋を通って南港発電所まで約20分。高速道路からは南港発電所のシンボルである「スカイタワー」が白

(五(88)年)開催)

く輝いて見え、早速、見学先の話題に花が咲いた。南港発電所は天然ガス利用の最新鋭発電所で、構内はたっぷりと緑のスペースが確保され、テニスコートや野球場を備えた「エルシティナンコウ」が設けられているなど、従来とは一味違う発電所となっている。「スカイタワー」と名付けられた煙突も曲線の美しい白い煙突で、夜間には季節によって色の変わるライトアップが行われている。

まずエルシティ館のホールで、ビデオにより発電所概要の説明を受け、3班に分かれて館内を見学。「ベンチャートリップ」、「エネルギー・スクウェア」など、家族そろって楽しみながらエネルギー、電気に関する情報を学べる構成になっている。ついで発電所制御室、タービン・発電機室へ。3基のうち1基が保守作業中で、解体された機器内部までを見学できた。構内にはCO₂リサイクル研究施設が設けられ、排ガス中から1日2トンのCO₂を液化回収し、メタノールの合成技術や藻類による固定化、水素生産等の研究も行われている。

昼食後、関西新空港へ向かう。佐野漁港でバスを降り、船に乗り換え、空港連絡橋を左に見ながら空港島へ。関西新空港は平成6年9月開港予定のわが国初の24時間空港である。開港を10ヶ月後に控え、工事は急ピッチで進められている。滑走路の舗装は完了。ターミナルビルも完工間近である。バス2台に分乗し、変電所を見学後、航空機が駐機するエプロンを経て空港島をほぼ一周。ターミナルビルは延長1.6kmという巨大なビルである。大きな鳥が地



上で翼を休めているように見える。ウィング間の移動用にはゴムタイヤ付の無人電車が用意されるとか。また不等沈下に備えてエプロンやターミナルビルはジャッキアップにより修正可能なシステムになっているようである。ついでエネルギーセンターを見学。ガスタービンで発電を行い、発生した排熱を利用して蒸気を作るコジェネレーションシステムが採用されている。蒸気は島内の地域冷暖房に利用される。

開港に向けて試験飛行をはじめとする数多くの検査、試運転が控えている。さらにアジアのハブ空港をめざすためには滑走路の増設など全体構想の実現に向けて御苦労が続く。関係者の努力が実ることを願うものである。

帰りはビールも入り、旧交を暖める人あり、休む人ありと和気合々で午後7時過ぎ梅田当着、解散した。今回は100名を越える方から参加申込を頂いたが、船の定員の関係上、会員の方々のみに制限をさせて頂いた。まことに申し訳ない限りである。最後に見学会のお世話を頂いた関西電力㈱南支店の方々をはじめ関係者に心からお礼申し上げる次第である。

研究室見学会

平成5年11月6日(金) 涼電会主催の研究室見学会が開催された。平成3年度までは毎年開催されてきたが、平成4年度の見直しに伴い、今回2年振りの研究室見学会となった。見学先は平成4年11月末に新建屋が完成した情報システム工学科とレーザー核融合研究センターである。

午後1時30分情報システム工学科新建屋1階の講義室に集合。参加者は学内関係者を含めて40名であった。吉野総務幹事の挨拶につづいて情報システム工学科白川功教授より同科と新建屋の概要が説明された。情報システム工学科は平成元年開設の工学部で最も新しい学科であり、情報システムの構築、応用、社会的影響評価に関する最先端の研究を行うとともに、情報システムのハード・ソフト両面の技



術的専門知識を備え、情報システムの特質をよく認識し、それを社会のために広く応用することのできる新しいタイプのエンジニアの養成を目指している情報システム基礎論講座(寺田研究室)、情報システム構成学講座(白川研究室)、集積システム工学講座(藤岡研究室)、知識システム工学講座(西尾研究室)、計画情報システム工学講座(薦田研究室)、社会情報システム工学講座(鈴木研究室)の6講座からなり、平成5年3月第1回の卒業生を社会に送り出した。新建屋は6階建てで、1階には講義室、2階には情報処理演習室が設けられ、3~6階は研究室になっている。

概要説明の後新建屋玄関で記念撮影を行い、5班に分かれて、各研究室と情報処理演習室を順次見学した。各研究室では熱のこもった説明に、質問も多くとび出し、予定の時間をかなりオーバーした。

ビール、コーヒー、ケーキと参加者がそれぞれ好みのものを選んで暫時休憩の後、レーザー核融合研究センターへ移動。ビデオによりレーザー核融合に関する説明を受けた後、2班に分かれて世界最大級のガラスレーザー激光X II号と爆縮実験装置を見学した。レーザーガラスや大型結晶の実物展示もあって、参加者は満足された様子であった。

最後に見学の準備、資料の作成、当日の引率、説明と多大のご協力を頂いた情報システム工学科ならびにレーザー核融合研究センターの皆様に御礼申し上げる。

(井澤靖和(電気39)記)

卒業祝賀・謝恩会

恒例となった卒業祝賀・謝恩会は平成6年3月25日午後6時から千里阪急ホテル仙寿の間にてとり行われた。学部および大学院の新卒業生270余名をはじめ、ご来賓、電気系教職員、湯電会役員の方々あわせて400名を越える参加者を得て大盛会であった。担当幹事の辻の進行で式典が開かれ、ご来賓の方々からお祝辞を賜った。湯電会成松啓二会長からは、したいこと、できること、すべきことを分別することの重要性を認識するようにとのご示唆をいただいた。大阪大学前総長熊谷信昭名誉教授は、19世紀末における発明、発見の例をひきながら、21世紀につながる日本独自の技術開発の必要性と卒業生に対する期待を述べられた。産業界でご活躍の諸先輩のお一人として、松下電器産業(株)常務取締役の堀内司朗氏は、製造業において商品を作るという立場から、つねに念頭に置くべきキーワードとして、コスト、品質、知的所有権の3つを挙げられた。また電気系教官の代表として、本年度の電子工学科長(これまでの教室主任は学科長という職名に変わった)の児玉慎三教授からは先生の恩師であるシステム分野の権威のデソー教授とザマー教授(いずれもカリフォルニア大学)のお話をいただき、あくなき好奇心が新分野の確立に役立つことを説かれた。そのあとご来賓の尾崎弘名誉教授、湯電会中国支部長の三上彦三氏が紹介され、式典を終えた。

このうち塩沢幹事の司会でパーティに入り、山口



次郎名誉教授の音頭で乾杯し、賑やかに歓談のひとときを待った。現在電子工学科の濱口研究室に客員研究員としてご滞在中のイリノイ大学ラヴァイオリ教授ご夫妻にも参加していただいた。宴もたけなわのころ楠本賞受賞者への記念品の授与を皮切りに、企業からの湯電会役員の多大なご協力により、恒例となった福引きが行われ会のムードは最高潮となつた。最後に四学科の卒業生を代表して電子工学専攻博士前期課程の渡辺健司君が謝辞を述べ、大阪工業大学学長で湯電会副会長の桜井良文名誉教授の万歳三唱で閉会となつた。

本年度も、卒業祝賀・謝恩会をこのように盛大に挙行することができました。会の準備のために種々ご協力いただきました役員を始めとする湯電会会員の皆様、ご多用中にもかかわらず快くご臨席賜ったご来賓の方々、電気系教職員の方々に厚く御礼申し上げます。また自頃から湯電会の世話ををして下さり、この会のためにも準備段階から当日の受付業務までお世話下さった事務局の安井晴子様、世話役としてお手伝い下さった学生諸君、電気系秘書の方々に厚く御礼申し上げます。

また記念品、福引きの景品を快くご提供下さいました以下の各社に心から御礼申し上げます。

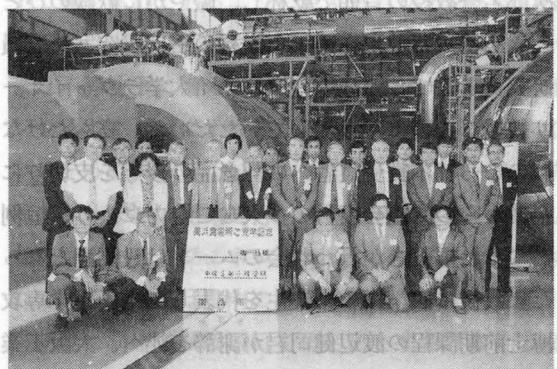
オムロン(株)、関西電力(株)、関電興業(株)、サントリー(株)、三洋電機(株)、JR西日本(株)、シャープ(株)、住友電気工業(株)、ダイキン工業(株)、(株)ダイヘン、(株)東芝、日本電気(株)、日本電信電話(株)、(株)自立製作所、富士通(株)、松下電器産業(株)、三菱電機(株)以上17社。

(辻毅一郎(電気・昭41)記)

平成5年北陸支部総会報告

平成5年度第4回湯電会北陸支部総会と原子力発電見学会が、6月12日(土)に支部会員24名が出席して開催されました。御来賓として湯電会顧問の山口次郎先生、尾崎弘先生、湯電会幹事の吉野勝美先生、事務局の安井晴子さまに参加いただきました。

今年の総会は、世話をする支部役員の在住する福



井県に、日本中で最も多く設置されているにもかかわらず、これまで見学した会員が少ない原子力発電所の見学会を兼ねて企画しました。

総会は、見学先の関西電力㈱美浜発電所の会議室をお借りし、例年通り行われた。まず岩澤支部長の挨拶があり、続いて、湯電会顧問の山口先生から祝辞を頂き、さらに湯電会会长代理とし、湯電会本部報告を含め吉野先生から挨拶があり、次いで、浅田庶務、木谷会計幹事より平成4年度の事業計画、平成4年度会計報告、平成5年予算案が説明され承認され、総会を閉会した。

引き続き、見学会に移り、まず関西電力㈱美浜発電所にある原子力発電所のタービン建屋、中央制御室、放水口等を見学した。次いで、建設中の動力炉・核燃料開発事業団の高速増殖炉「もんじゅ」を訪れ、説明を受けた後、高台から建設途中の発電所を一望し、シミュレータ室等を見学した。これらの発電所は安全に万全を期すため警備も厳重に行われており、見学に際しボディチェックを受ける程であった。

懇親会は関西電力㈱水晶浜クラブにおいて開催した。御出席の先生方の挨拶を頂いた後、出席会員の自己紹介、近況報告が行われた。懇親会が御開きになった後も、宿泊室で、来賓の先生方を含め一同在学中に戻ったような活発な議論が、夜が更けるのも忘れるほど活発に行われた。

今回の企画に当り、関西電力㈱には大変なお世話を頂いた。ここに記してお礼を申し上げます。

(北陸支部長 岩澤 宏(通信・昭24) 記)

平成5年度湯電会中国支部設立総会報告

平成5年10月23日(土)広島市東区せとうち苑にて湯電会中国支部設立総会および祝賀会が午後1時30分より5時まで支部会員31名の出席を得て開催されました。

平成4年2月に本部事務局安井晴子様より中国支部設立にあたっての幹事就任の依頼を受けました。すでに、支部として東京、名古屋、北陸、四国、九州が発足し、湯電会の発展と共に会員の交流が盛んになりつつあり、中国支部発足について強い要請を受け同窓の一員として責任を痛感していました。その後支部発足に向け、中国支部会員のデータや各支部発足の資料入手し、平成5年6月より本格的に設立総会開催に向けての幹事会を重ねて準備して参り、念願かなって中国支部の旗揚げとなりました。なお、当支部会員数は、鳥取県15名、島根県6名、岡山県61名、広島県41名、山口県24名の計147名です。中国支部の事務局は、中国地方全域をカバーしている中国電力に置きました。

さて、設立総会および祝賀会には、本部より成松啓二会長、山口次郎先生、尾崎弘先生、白川功先生、吉野勝美先生および事務局安井晴子様に来賓としてご出席いただきました。

総会では、中国電力㈱岡山市店長岩川泰而氏(昭34電)の開会挨拶に続き設立経過説明、支部長を中電工業㈱相談役三上彦三氏(昭23電)とする新役員の選出、支部会則、平成5年度事業計画・予算



等の議事事項を全会一致で承認しました。続いて新支部長三上氏の挨拶、濬電会会长成松氏の挨拶をいただき、最後に山陽放送㈱社長河内山重高氏（昭25通）により「最近の放送界の話題」と題して記念講演が行われ、現在の民放が地上系の放送と衛生系の放送が併存する時期と捉えその将来展望構想を興味深く拝聴することができました。

記念撮影後の祝賀会は、山口先生の音頭で乾杯し、思い思いに近況やなつかしい学生時代を語り合いました。また、吉野先生・白川先生の祝賀スピーチをいただきました。それぞれに時の経つのも忘れ一時を過ごし、尾崎先生の音頭により濬電会の発展を願っての万歳三唱で締めくくり、来年は岡山市での再開を誓い合って解散しました。

なお、中国支部設立総会に祝電をいただきました各支部長殿、また、中国支部設立にご指導・ご協力をいただきました皆様方にこの紙面をお借りし厚くお礼申し上げます。

（坂本昭彦（電気・昭42）記）

平成5年度 四国支部総会・見学会報告

平成5年度第2回濬電会四国支部総会が、平成5年11月27日（土）に、松山市にある四国電力㈱原子力保安研修所で開催されました。今回の総会は、開催場所を道後温泉で名高い松山市に移した結果、93名の支部会員のうち22名の参加を得ることができました。

ご来賓として、濬電会元会長の尾崎弘先生、濬電会総務幹事の吉野勝美先生、濬電会幹事の白川功先生および本部事務局の安井晴子さんの4名に参加して戴きました。総会は坂本支部幹事の司会のもとに、山下支部長の挨拶の後、吉野先生から成松会長のご祝辞の代読という形でご挨拶をいただきました。引き続き、総会議事に入り、支部規約および支部役員の確認のあと、平成4年度活動報告および平成5年度の活動計画が承認され、約30分間で総会を終りました。

かし、昨年の幹事会で他の会社にも拡大すること



総会会場と同じビル内にある㈱四国総合研究所の電子研究所を井上氏（昭47卒修）の案内で約1時間かけて見学した後、市内のホテルに移動し、尾崎先生のご発声による乾杯で懇親会に入りました。会場準備の不手際で開始が予定より30分も遅れてしましましたが、先生方を囲みながらかな歓談のひとときを過ごすことができました。その中で、白川先生からユーモアあふれるスピーチをいただき、最後は恒例になりつつある吉野先生の万歳三唱で懇親会を締めくくりました。

翌日は、尾崎弘先生、安井さんはじめ11名の参加を得て、伊方原子力発電所の見学会を実施しました。当日は朝9時にホテルを出発しましたが、日曜日のせいもあり予定よりも早く約2時間で八幡浜市の先にある日本一長い佐田岬半島に到着しました。半島の尾根伝いにメロディーラインと呼ばれる観光道路（実は国道で通行料不要）が走っており、当日は少々風が強かったものの天候に恵まれ、遠くに九州地方の沿岸まで眺望することができました。発電所を見下ろす位置にあるPR館を見学した後、運転中の1、2号機（電気出力は共に56.6万kW）の中央制御室と3号機（電気出力89万kW）の建設現場を見学しました。特に、建設中の3号機では、服を着替えないまま原子炉のある格納容器内に入り、運転開始後には放射線の影響で到底立ち入ることができないようなところまで見学することができました。

一同、感慨を胸に発電所を後にし、午後5時過ぎ

にJR松山駅で解散しました。

(井門喜信(電気修・昭51)記)

平成5年度九州支部総会報告

平成5年12月11日(土)17時より、第2回九州支部総会が大分西鉄グランドホテルにて開催されました。総会に先立ち、14時50分JR大分駅に集合し、九州電力様のご好意により九州電力新大分火力発電所を1時間余り見学しました。広大な埋立地に液化天然ガスによる最新鋭の高効率タービンエンジンと発電機をつぶさに見ることができ我が国のハイテク技術に改めて敬服した次第です。また、発電機の製作には大手の重工業企業が参加されており、それぞれの企業で同窓生がご活躍されていることを伺い、濬電会諸輩が我が国を支える重要な使命をになっておられることにも感銘いたしました。

総会には、ご来賓としまして、山口元会長、吉野先生(成松会長代理と庶務幹事として)および事務局より安井様に御出席戴きました。支部会員は大矢知(電昭28)、河村(電昭29)、岡村(電昭29)、村田(通修昭32)、狩野(電昭34)、森田(電昭39)、豊国(子昭43)、金藤(電昭46)、笹尾(子昭47)、山下(子昭47)、渡辺(信昭50)、吉野(電修昭51)、武石(信ハ号)、浜辺(信ハ号)の14名が列席しました。河村支部長の総会開会の挨拶から始まり、お年を感じさせない山口先生の熱弁による濬電会会員の叱咤激励のあと、成松会長のご祝辞を吉野先生が

代読されました。支部代表幹事より平成4年度の事業報告、決算報告並びに平成5年度の事業計画と予算案の提示がなされ、満場一致でご承認、引き続き同会場で懇親会に移りました。

乾杯の後、自己紹介に移り、各職場での自慢話や近況報告がなされました。中でも人材獲得がいかに難しい世相かの話題になり、山口先生から人事は最も大事なこと、精魂込めて死力をつくしてやらなければならぬと叱咤されました。なごやかな雰囲気のうちに会も終わりに近づき、安井様から御礼の言葉をいただき、20時頃お開きとなりました。懇親会の途中、所要のため数名が退席され、記念写真に写っておりません、幹事側の不手際をお詫びいたします。

当日は土曜日にもかかわらず濬電会一行の見学会に大切な時間を裂いて、親切にご案内をして戴きました九州電力の方々にこの場を借りて御礼を申し上げます。本部からのご来賓の方々、大分での開催にお世話を戴いたダイヘンテックの岡村社長、河村支部長、また遠路沖縄よりご出席戴いた村田先生、また参加されました支部会員に衷心より御礼申し上げます。

(金藤敬一(電気・昭46)記)

平成6年濬電会東京支部総会報告

平成6年の濬電会東京支部総会が、4月1日(金)に郵便貯金会館・メルパルク東京で開催されました。

総会には、基礎工学部(電気、制御、情報)も含めた東京支部会員、大阪から成松濬電会会长はじめ関係者の皆様、多くの先生方のご出席をいただき、約150名の参加者による盛会となりました。

支部総会は、小島東京支部長のご挨拶、今回の幹事会社である沖電気工業(株)の山本常務取締役の挨拶で始まりました。次に成松濬電会会长のご挨拶、吉野教授の大学の近況、辻教授の濬電会の近況のお話を戴きました。

他の濬電会支部の活動に喜び、母校の大学院の拡





の街とも言われますから、校内の様式物の高さ制限を充に時代を感じ、卒業式後の謝恩会の様子の遠い昔との違いに驚き、瀬電会の財政事情に会費のことについてを巡らせる等、1年ぶりに母校との繋がりを実感しました。

引き続き来賓としてご出席戴きました大阪大学工業会東京支部竹内会長様から、工業会の活動状況のご報告と、電気／情報系の枠を超えた幅広い工業会行事へのお誘いを受けました。

支部総会行事は以上で終了し、山口名誉教授の、母校を卒業して上京してきた後輩へのやさしい思いやりを含むご挨拶と、それに続く乾杯で懇親会に移りました。昭和1桁卒から昨年卒業まで幅広い会員が、恩師、先輩、後輩、同窓生との話に花を咲かせ、旧交を温めました。

瞬く間に懇親会も終りの時間となり、次回の幹事会社である富士通(株)の高橋修氏からご挨拶を戴き、最後に尾崎名誉教授のご発声により、大阪大学／瀬電会の発展、会員の健康と活躍を祈念した万歳三唱を行ない、本年の支部総会を終了致しました。

従来の総会幹事は、団体幹事会社12社の内の多数の会員が在籍している8社の持ち回りでした。しかし、一昨年の幹事会で他の会社にも拡大すること

が決められ、その適用1号として沖電気が本年の支部総会幹事を務めました。昨年の支部総会では、見習いとして、総会の運営を勉強させてもらっていましたが、実際やってみますといろいろ戸惑うことも多く、会員の皆様にご迷惑をおかけしたのではないかと心配しております。しかし、前年度幹事会社の日本電気の幹事さん、瀬電会事務局の安井さん、その他多くの関係者の皆様のご支援により無事役目を務めることができ、厚く御礼申し上げます。

(矢後嘉信(通信・昭和40)記)

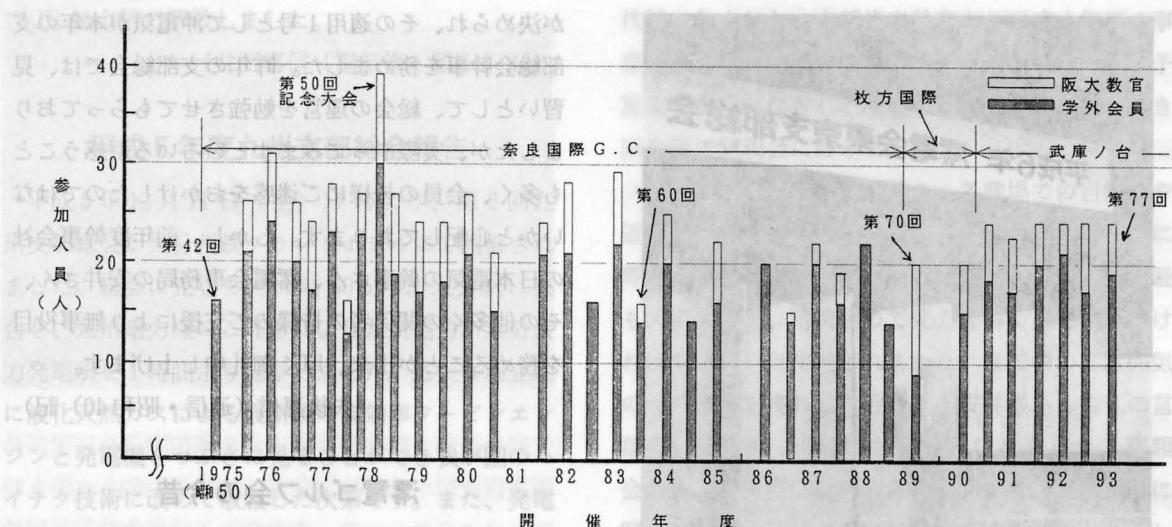
瀬電ゴルフ会の今昔

次頁の図は近畿日本鉄道の中井実、小田博基の両君が、これまで保存されていた資料を基にして作られた瀬電ゴルフ会の経過を示したものである。

以下では(1)ゴルフ会の始まりから1975年(昭和50年)の第42回のゴルフ会の直前まで、(2)1975年の第47回ゴルフ会から1989年の第70回まで、(3)1990年の第72回から1993年の直前まで、(4)1993年、第77回ゴルフ会の4つに分けて述べよう。

(1) 瀬電ゴルフ会の始まりから1975年までのデータを集めため、関西地区の電気、機械化学などの企業で、これはと思いつく人々に文書、電話などを通じて種々問い合わせたが目的を達することができなかった。それと同時に、今は故人の七里義雄、熊谷三郎両先生には瀬電ゴルフのため、一方ならぬ御盡力を頂いたことと思い、深く感謝申します。なお、数ヶ月前、当時三洋電機に勤めておられた山下義美君(電・昭22)より、第37回の瀬電ゴルフ会は山の原ゴルフ場で、第38回と第39回は新奈良で、第40回は奈良国際で、第41回は枚方国際ゴルフ場でプレーをした記録が見つかったという通知が私にとどいた。

(2) 第42回(昭和50)のゴルフ会からは近畿日本鉄道の御配慮で、ゴルフ場は奈良国際ゴルフ場に固定され、会の進行のお世話は中井実さん(電・昭和51年卒)が担当していました。



濬電ゴルフ会の経過

17) と小田博基さん（電子・昭38）の両君になった。こうしているうちに世間のゴルフ熱が高まり、奈良国際の日曜日ゴルファーの人数に制限がつけられるようになった。そこで第72回（平成4年）から兵庫県の武庫の台ゴルフ場に移った。

(3) 武庫の台ゴルフ場では関西電力㈱のお世話で、第72回より春1回、秋1回、（日曜、土曜各々1回）プレーをしている。プレーの進行などは濬電会員の有志のお世話になっている。

(4) 第77回のゴルフ会は昨年の11月28日、例のようにJR福知山線、道場駅に近い武庫の台で行われた。当日は天候不順だったので申込者の内、数名が欠席され、参加者は20名であった。午後は風も収まり、気温もすこし上昇した。この日の優勝者は次のような。

なお第73～76回のゴルフ会のプレーの進行にお

世話になった幹事の松井昭夫君、中川興史君、小田博基君の3名は勤務地又は勤務内容の変更で、この度幹事をやめられる。そして新たに白川功君（電子・昭38・阪大教授）武藤成生君（電・昭39・関西電力）和栗仁君（電・昭28・京都ダイヘン）の3君が幹事の役を受けついでもらうことになった。

ここに松井・中川・小田の諸君に厚くお礼を申し、併せて今後の一層の御発展を祈ります。また幹事になられた白川功、武藤成生、和栗仁の3君に今後かずかずの御労力と御協力をお願い申します。

なお、この春のゴルフ会は5月28日（土）、例年のように武庫の台ゴルフ場で催すことになった。濬電ゴルフ会の会員として名簿に未記載（見届）の濬電会員は会員登録のため至急幹事の和栗仁君の自宅に電話（0727-94-0983）で20時頃お願いします。

（濬電ゴルフ会会长 山口次郎
（電気・大正17／昭7）記）

話題

京の街から大学が流出

立命館大学理工学部教授
西岡 郁夫

立命館大学理工学部教授

井上 和夫

(電気・M38、D41)



京都の西北、衣笠山麓の立命館大学理工学部に勤務して28年になります。この理工学部が1994年4月に滋賀県草津市の名神高速道路添いに移転しました。京都市は人口に対する学生数比が全国一で学生の街とも言われますが、市内の建造物の高さ制限やその他の規制が強く、大学が市外に流出しています。同志社大学工学部も本年4月に京都府綴喜郡田辺町に移転しました。平安京が京都にできたのが西暦794年、本年は平安建都1200年ですが、大学が減少するのは淋しいことです。

立命館大学理工学部が移転した名神高速道路添いは滋賀県びわ湖文化ゾーンと呼ばれ、東から立命館大学、滋賀医科大学、県立図書館、近代美術館、龍谷大学が並んでいます。立命館大学理工学部の敷地の広さは58ヘクタール約17万坪で、滋賀県から無償提供されたものです。

大津市から草津市にかけての周辺には古代遺跡が散在しています。奈良時代・平安時代には都も近く、びわ湖の自然環境とかかわって多くの埋蔵文化財が見つけ出されます。立命館大学のキャンパスでも7世紀代(白鳳時代)の製鉄たら跡・木瓜原(ボケワラ)遺跡が発掘されました。製鉄炉や大鍛冶施設、梵鐘の鋸造遺構などが見られ、当時の製鉄遺跡としては国内最大級のことです。日本では砂鉄が豊富で、たら跡は各地で見られますが、木瓜原遺跡は滋賀県マキノのたら跡と同じ鉄鉱石を原料としていたものです。発見されたたら跡は、総合グランドの400mトラックの地下に展示室を設け、発

掘された状態のまま保存されています。

立命館大学理工学部は新キャンパスに移転し新たに情報学科、生物工学科、環境システム工学科が増設され、学生数も1学年840名から1110名となりました。大学院も、学部の学科と専攻が続いていたのを、数理科学専攻、情報システム工学専攻、物質理工学専攻、環境社会工学専攻にまとめられ、定員も博士前期課程1学年110名から500名になりました。電気電子工学科の学生は電子システムコース、人間情報科学コース、物質機能コース、エネルギーコースに進学することになります。

新キャンパスの情報基盤整備はマルチベンダー(メーカ)方式をとり、情報処理教育を中心にワークステーション680台、パーソナルコンピュータ300台、スーパーコンピュータを含む高性能サーバーマシン15台を設置しています。伝送基盤としてのネットワークはデータ系・音声系・映像系を部分的に統合し、LAN、PBX、CATV(大容量双方向60チャンネル)、BA(ビル管理オートメーション)、また、高速・大容量の基幹伝送路(FDDIバックボーンLAN)を設置し、さらに将来の線路敷設を容易にするBFS(ブロン・ファイバー・システム)を採用しています。

立命館大学には数年前から民間企業からの客員教授を迎えた寄付講座がありますが、新キャンパスでは更に産学共同研究施設も設置しています。すなわち、委託研究のみならず、大学院への社会人入試も含めて、企業からの派遣研究者との共同研究も可能な研究センターが設立され、社会的ネットワークを広げています。

新キャンパスへの交通は、JR草津駅と瀬田駅の中間に新駅を現在建設中で、キャンパスは新駅から2kmの位置です。私の研究室は7層研究棟の5階で、窓からびわ湖・比叡山が一望できます。新キャンパスの研究室で気持も新たに、研究・教育に取組んでいきたいと思っています。

私の趣味

NTT 技術情報センター

小山 正樹

(通信・昭39)

大学を卒業してはや30年、大学院を終了して25年が経った。大学の後はNTTの研究所に入ったが、その間ずっと研究開発とそのマネージメントに従事してきた。そういう意味で研究の楽しみと苦しみを身を持って体験できたのは幸運だったと思う。

研究者は言うに及ばず、誰でも年をとってくると趣味を持った方がよいと言われる。若いときはガムシャラに仕事ができるし、それが楽しみであるが年をとるとそれはいかない。同年輩と遊ぶことも少なくなり、子供も相手にしてくれなくなる。必然的に、女房の顔を見る機会が多くなる。しかし、女房はどうと、今日はやれ音楽会、あすは学生時代のクラブ懇談会だと楽しそうにでかけていく。確かに、年をとると趣味を持つべしと実感できるようになる。

というわけで、数年前からコンピュータを趣味にすることにし、今でも続けている。もっとも、コンピュータといつてもただのパソコンであり、最近はやりのマルチメディアタイプではない裸に近いコンピュータである。これにコンパイラを乗せてプログラムを作っている。なんだ、つまらないものを趣味にしているなと思われようが、さにあらず、本人は立派な趣味だと思っている。またこれが大変おもしろい。

NTTの研究所では主に光通信の研究をしていて、コンピュータとの付き合いは学生時代にさかのぼる。その当時は、紙テープでシステムをロードし、自分のプログラムも紙テープにとってコンピュータを走らせる。メモリも数10キロバイト程度であり、何ともコンピュータとは扱い難い機械だなと思った



ものである。また、プログラムも機械語で書かねばならず、そのバック取りは大変な苦労であった。それが、いまではパソコンと言えどもはるかに昔のコンピュータの性能を凌駕し、おまけにテレビ（ディスプレイ）がついている！。こんな高級な機械を趣味にせずして、なにを趣味にできようか、と思った次第である。

というわけで、「私の趣味はコンピュータです」と最近は公言しているが、その時の相手の反応がおもしろい。相手が中年以上の技術屋（かつて）の場合、だいたい「へー」の返事が返ってくる。この返事には「俺はできないでお前はすごい」という意味もあるが、「なんで、いい年していまさらコンピュータなぞがおもしろいのか」という意味合いが強いと感じられる。相手が若い人の場合は、「すごいですね！」と応えるが、「物好きな中年おじさん」といわれているような気分になる。

ところで、最近はマルチメディアこそ次のビジネスと言わんばかり、新聞、雑誌にマルチメディア関連の記事が滅法多い。そこに、登場する人物は大変立派な見識をお持ちのようだが、大抵コンピュータが扱えないかつての技術屋であるのがおもしろい（もっともこれはNTTだけの現象かも）。一方で、日本はコンピュータが弱い、ソフトが弱いというビジネス的見方の記事も多い。何故そうなのか、はおもしろい研究テーマになると思う。日本人の持つ気質、教育、規制緩和、社会システム、産業システム等々、色々な要因がからんでいるようである。

いずれにしろ、マルチメディア時代の到来にはもう少し時間がかかる気がするが、ぜひそれまで、現在の趣味を持ち続け時代に敏感に反応できるトレンドィーな自分を保ちたいと願っている。その結果、「私の趣味はコンピュータです」と言うのが恥ずかしい時代がくるのを楽しみにして、今日もヨーロッパに遊びに行った女房のいない部屋でコツコツとキーボードをたたいている。

日米パソコン事情 ますます拡がる較差

インテル・ジャパン(株)

西岡 郁夫

(通信・昭41、M44)



インテルに移って約1年半、目下の最大のテーマは日本のパソコンのトータルマーケットを拡張すること。アメリカと比較して我が国におけるパソコンの発展はまだまだ遅れている。特にパソコンをネットワークに接続して活用する分野ではその差は大きい。日本企業の今後の対米競争力を考えるときに情報力は重要なキーワードであるはずだが、残念ながらその情報較差が縮小するどころか拡大していくのはなぜかを考察してみたい。

まず事実であるが、日本ではネットワークに接続されているパソコンはオフィスにあるパソコンを母数にしても14%程度だと言われている。アメリカでは60%強であろう。ここ数年NETWAREの普及で日本のオフィスでもパソコンのネットワーク化が進んだと思われがちだが実際ににはプリンタシェアリングが普及したにすぎないらしい。パソコンによる電子メールシステムをついに導入することを決めてその実際の効果を確信できないために、20人に「パソコンを1台から」などという中途半端なことをする会社が多く、20人に1台と言うことになると部長のデスクに置かれることになりかねない。これでは金輪際使わない人のデスクのうえに置くことになる訳で、これでは最初から失敗することは決定的である。トップ自身の決断が見られない典型である。社長自身が仕事のしかたを変える決断をしなければならないのに、社長はパソコンとは無関係と思っておられることが以外と多い。「社長がパソコンを使う?」というふうに、まるで、「社長が複写機を使う?」と同じように考えておられるらしい社長が多いのである。パソコンと複写機ではその戦略性に

大きな差があることを認識しておられない。逆に社長自身がパソコンによる戦略的情報活動の重要性を確認して自身で電子メールにアクセスする場合には状況は一変する。社長が注目して情報を求めている電子メールの場合、部下はアクセスしないわけにはいかない。戦略的な情報の発信者たる部下は注目を得るし理論的で的確に部下を指導する上司の言動も経営者に見えるガラスばかりの経営も可能となる。電子メールは議論の内容が記録されていくし、感情や上下関係で提案の良否が決まる事のある日本的な経営を一気に論理的経営に変革する効用さえ期待できる。紙の決裁書には承認を与えません。承認が必要なら電子メールで提案をしなさいというトップの決断で一気にシステムが確立したという富士通の関沢社長の決断が記憶に新しい。

LANが日本のオフィスに普及しないもう一つの理由に日本のオフィスの環境があるといわれる。大部屋にみんなが机を接しているオフィスではコンピュータネットワークよりも「おーい、××君」とやったほうがてっきり早いというお家の事情がある。したがってLANは普及が遅かったがWANでは日米の差はかえって少ないかも知れない。ただし日本の場合にはNETWORK PCの前に解決しなければならない問題がある。

(1) 日本語の問題。キーボードとの一対一対応が可能なアルファベット26文字と違って、漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットなど4000文字を駆使する日本語には入力の方法にうまいものがなく人々特に中高年の抵抗が大きい。

(2) 職場の階層化が確立している日本企業の職場では管理職以上の人人が自分で書類を1から作成することは稀であり、一部の担当者だけがワープロ業務に習熟していればことの足りる職場である。

などなどの理由はよく言われるところであるが、これに甘んじていてよいものか?

日本の企業がアメリカをはじめ世界の企業を相手に強い競争力を維持するために本当の意味での全社員を戦略化する情報システムが必須条件である。

国境の町パッサウ

中央大学理工学部
情報工学科教授

篠山修治

(電子・昭47、M49、D52)



中央大学における情報工学科新設に少しあは役立ったということでしょうか、3年程繰り上げて1年間の在外研究に出かける機会が与えられました。そこで、1993年4月から4ヵ月半ドイツのPassau大学に、残りはCalifornia大学Santa Barbara校に出かけることになりました。

パッサウは、ローマ時代の遺跡も残っているような人口5万程の古い小さな美しい町で、ミュンヘンの東約200km、オーストリアとの国境にあります。黒色をした少し小さなイルツ川、茶色いドナウ川、水量が多く深い緑色をしたイン川がこの地で合流し、この先、美しき青きドナウとまではいきませんが、ドナウ川という名でウィーンの方へ流れて行きます。川が三つも集まっていますので、洪水が多発し、この7月にも川側の道路が冠水しました。

パッサウ大学の計算機科学部は、数学関係の教授・助教授も含めて約15名程の小さなものです、雑誌Sternに掲載された大学のランキングによると、教授の質や教育レベルでは上位に入っています。ただし、就職する企業の少なさが原因か、町の魅力だけでは、下位にランクされています。このランクは、大学教授による他大学の評価を総合して求めたものですから、信頼性は高いでしょう。学生数は約九千で人口の1/6を占めていますので、地方紙(Passau Neue Presse)に大学用のカラム(なんと私の訪問と講演案内の記事もある)があつたり、市議会議員に学生代表が居たりと、大学は町において重要な位置を占めています。

このような小規模な大学町であるおかげで、物価の安さ(ミュンヘンの2/3以下)、治安の良さ

(乞食も居ない)、それに人情味(雨が降れば隣の洗濯物も取り込んでくれる程)を十分に満喫できました。生活費が安かったため、旅費にお金を回し、ドイツの3大学1研究所2企業を訪問しましたが、都会にはホームレスが居たりし、その差を感じました。

さて、ご存じのように、こちらの1週間の労働時間は38時間のところが多く、金曜日には3時になると大学も閑散としてきます。旧東ドイツ側に流れれるお金の額と、この労働時間の少なさのために、ドイツの将来を嘆く人が沢山いました。もちろん、管理職はもっと働いており、先生やアシスタント(日本の博士課程後期の院生に相当するが、給料を貰っている)は土曜日にも必ず何人か来ていましたが、町の大多数の人は趣味のクラブなどで余暇を楽しんでいるようでした。ドイツでは、3人集まれば、Verein(クラブ)ができると言うそうで、多くのクラブがあるそうです。この町では、チェスやカード等のクラブの会合場所は普通のレストランです。そこでは、安い値段で一杯やりながら(ビール500mlが約200円。Weissen Bierがうまい!)、何時間もゲームを楽しめます。都会ではまず不可能なことでしょう。

このようなドイツの田舎に居りましたが、『田舎の3年、京の昼寝』という情報の欠如を感じなかったのは、コンピュータネットワークに象徴される通信技術のおかげです。最新の情報や知りたい情報は、各種のニュースや電子メールで素早く得ることができますし、残してきた学生の研究に対する指示も、持参したノート型パソコンを使って、日本語で殆ど遅滞なく行うことができます。もちろん、学生の中には、この状況を好ましく思っている者が居るかもしれません。

これからのネットワークにおいては(人間関係のネットワークも含め)、2点間の距離よりは結合のためのリンクの太さがより重要になるだろうということ、パッサウでのような生活を続けることができれば寿命が延びるだろうナ~ということが、パッサウで得た感想です。

退官された先生方の近況

横山昌弘

早いもので平成3年3月末で約40年間通いなれ住みなれた大阪大学を退官し近畿大学工学部に移ってから3年が過ぎ去ろうとしております。定年退官に際しましては濬電会はじめ大阪大学の皆様方より心あたゝまる記念祝賀会を催して頂きましたことをこゝに改めて厚く御礼申し上げます。

さて近畿大学工学部は、理工学部が東大阪市にあるのに対して昭和34年に広島市と呉市を中心とする瀬戸内広域産業圏の確立と、さらに日本の産業と技術開発に貢献することを目的として、呉市広古新聞に設立されました。

平成3年4月より、縁あって特任教授として工学部勤務となりましたが、初年度は私の所属します電子情報工学科はまだ発足しておらず、呉キャンパスの経営工学科の学生に電子工学概論の集中講義をビデオを交えて行いました。平成4年4月からは東広島キャンパスが完成し、そこに新たに発足した電子情報工学科、機械システム工学科の他に呉キャンパスよりの工業化学科、建築学科の計4学科が東広島キャンパスにあります。そして呉キャンパスの方には経営工学科と機械工学科の2学科がそのまま残っております。平成4年4月からは、私は東広島キャンパスで工業化学科と建築学科の学生に、力学及び力学演習を、又新設早々の電子情報工学科の1年の学生には、電子工学概論ができるだけビデオを用いて行いました。平成5年度は電子情報の学生が1年と2年に入って参りましたので、電子工学概論のほか、前期は量子物理学、後期は電磁波工学を、又工業化学科の学生には、力学、力学演習を教えております。平成6年度は電子情報工学科が学生は1年、2年、3年と揃ってまいりますので、他学科学生に対する講義はなくなり、電子情報工学科学生に対する専門講義として、前期は電子工学概論(1年)、量子物理学(2年)、レーザー工学(3年)、後期は電磁波工学(2年)、レーザー応用(3年)と極めて密度が高く充実してまいる予定です。平成8年度からは大学院設立が計画されております。

近畿大学工学部東広島キャンパスは東広島市高屋うめの辺にあり、JR山陽本線の西高屋駅で下車(広島-西高屋約40分)あとはタクシー5分、徒歩15分の所にあり、環境は極めてのどかで静かなところにあります。校舎も新設ですので非常に奇麗でよくとゝのっております。先生方も極めて教育、研究に熱心で新設学科の基礎をつくる意気に燃えておられます。濬電会員としては電子情報工学科には学科の中心として学科長に坂本昭彦教授がおられます。この他岡田和之講師、その他工学部原子力出身の椿原啓教授、又教養課程には基礎工学部電気出身の渡辺昌昭教授がおられます。

私は毎週火曜に関西大学大学院で非常勤講師として工学研究科で講義をした後、水曜に新幹線で広島にまいり、木曜、金曜と近畿大学工学部で講義をする2泊3日の新幹線通勤をしております。

平成5年10月23日(土)には濬電会中国支部設立総会が、坂本教授、岡田講師、天野さん(近大)の熱心な御努力により、広島市内せとうち苑で開催され、大阪より山口次郎、尾崎弘、吉野勝美、白川功の諸先生方と安井晴子さん(濬電会)がやってこられ、盛大に設立総会を挙行し、そのあと記念祝賀会を行うことができました。こゝにあわせて御報告申し上げます。

この他、私は平成5年3月19日(金)-25日(木)まで電気学会プラズマ研究会と台湾新竹国立交通大学との共催で台湾新竹市で開催されました「中日電漿技術興応用研究会」に参加し、はじめて家内と2人台湾

に参りまして研究会ともども、参加者の方々と一緒に、基隆、花蓮、高雄、台南、新竹、台北と台湾本島一周のバス旅行を楽しむことができましたことは楽しい思い出でした。

電気学会の方は、現在、電気物理技術委員長、基礎材料共通部門研究運営委員会委員、光X線応用超微細加工技術調査専門委員会委員等をつとめております。

溝電会会員の皆様方の今後かわらぬ御交誼と御支援を御願い申し上げると共に、溝電会の今後益々の御発展を祈念しております。

現在の勤務先：近畿大学工学部電子情報工学科

〒729-17 東広島市高屋うめの辺一番番

TEL. 0824-34-7000

FAX. 0824-34-7011

の在外研究に出かける機会が与えられました。そこ

連絡先（自宅）：〒659 芦屋市松浜町 2-10

TEL. 0797-22-3533

交際費は多義歛中業の監理業工事事務の特許工營業のるかに東京にても本所より業者である特許工事

か特許工事事務所より業者にて本所より業者である特許工事

であります。また、本所より業者である特許工事事務所より業者である特許工事

うなままである。また、本所より業者である特許工事事務所より業者である特許工事

又のままである。また、本所より業者である特許工事事務所より業者である特許工事

卒業生の近況

六島 昭治（通信・昭24）

昭和47年、警察庁技官から三菱電機に転職、通信機製作所でシステム計画を10年余り担当した。定年直前に情報通信システム開発専門の直系ソフト会社が創設され、社長5期のあと相談役在任中。発足時15人から500人の中企業に成長したが、三菱電機での対阪大リクルートリーダー実績を生かし、技術者採用では陣頭に立った。成果は阪大の人脈に依る所大で、大変有難く思っている。

今年は卒業45周年、思えば昭和24年警察無線に入って、当時のハイテク；米軍の30MHz車載無線機による回線試験に始まり、移動無線の開発、建設、保守のほか短波、マイクロも経験し戦後の無線史をユーザ、メーカー両面からずっと眺めて来たが、今漸く花開く携帯電話の普及は正に通信の理想への巨歩、転た今昔の感にたえない。現在は週3日出勤、“人買い”の仕事もやがて後進に譲り、あとは趣味に生きたいと器楽演奏を欲張って3種、67才の手習中である。

（三菱電機マイコン機器ソフトウェア㈱ 相談役）

六島 大克（電気・昭25）

1990年、創立初期より40年間勤務した大阪府立大学を定年退職し、同年4月新設の大坂産業大学情報システム工学科に、創立時の学科主任として着任して4年を経過、本年3月第一回卒業生を送り出し、4月から大学院修士課程も設立される予定です。

本学科は、情報ネットワークと通信システムに支えられる現在の高度情報化社会の要請に応えるべく、コンピュータ情報処理に関する基礎学力、処理技術の習得を目的として、情報基礎、計算機工学、情報通信シ

ステム、生産情報システムの4本の柱で編成されています。

阪大在学時は強電、府大では通信、本学では情報と、省みて誠に忸怩たるものがありますが、幸いにも本学には著名な御先輩でIEEE Fellowの藤沢和男先生、丸橋徹先生が電気電子工学科に着任しておられ、貴重な御教示を賜わり大変感謝しております。

私学の有難さで、着任以来、米、独、仏、伊、豪、伯、洪の各国で開催された国際会議に参加発表でき、本年も露、中国に海外出張の予定で、残された在任期間を有意義に楽しみたいと思っている次第です。

（大阪産業大学 情報システム工学科 教授）
満保 正喜（通信・昭25）

2年前、金沢大学を定年退官し、4年前に創立された富山県立大学に就職した。ここでは、教育と研究面で立派にせねばならないが、大学創設の第一目的である県民のための大学、即ち、地域の発展に連なる大学を指向せねばならない。

ここは電子情報工学科と他の2学科から成る工学部と農業系短大部からなる小さな大学である。それで大学の公開講座を1人当たり2-3年に一度の割合で講演して居る。又、県内企業との研究交流会、見学会の開催等、地域との交流も大切にしている。

今年3月に第一回の卒業生を世に送り出した。昨年は大手企業からの求人が新設大学には非常に厳しかった。が、我々の分野は中小企業からの求人のニーズが強く、他分野に比べそれほどの事もなく、幸運であった。今、電力会社等が21世紀の高度情報化社会における音声画像等の統合ディジタル通信網業界に参入しようとして居り、電気会関係分野の重要性を改めて痛感している。

（富山県立大学工学部電子情報工学科）
武市 吉博（通信・昭29）

卒業以来三菱電機に多年勤務し、その後太洋無線を経て、現在エム・シー・シーで、通信事業とその技術の伸展に微力を尽くす機会を与えていただいています。

この間、アンテナの研究開発を始めとして、主に電波および宇宙の分野の仕事に従事してきました。これらを通じて、人と事業と技術について多くのことを学び得、まことにありがとうございます。

企業は人なりと言われますが、まさに実感です。そして、顧客の認める新しい価値の創造が事業を伸ばす道であり、需要に根ざした難題こそ技術進歩の源泉であるとの思いを深くしています。

このような経験を現在の仕事に活かして、社会のお役に立ちたいと努力している毎日です。

（株エム・シー・シー 取締役副社長）

豊田 浩一（電気・昭34）

レーザーは20世紀最大の発明、という先生の言葉に触発されて研究を始めて30年。真空紫外線などといふものは物理の教科書の片隅にあったぐらいの記憶しかない。それがレーザーになる時代であるから、30年間の進歩を肌で感じる。最近は、真空紫外線、X線のような波長の短いレーザーの研究をして、微細加工に利用することを考えている。こんな物理とも化学とも工学とも判然とせぬ研究に意欲を燃やすのが電気屋の宿命かと思う。

教育の面では、4年前から埼玉大学博士課程に客員教官として参加。我が国では最初のケースとなるが、

われわれの研究所で学位授与が出来る道を開く。留学生、社会人学生相手に、また新しい経験をさせて貰っている。(理化学研究所・レーザー科学研究グループ主任研究員)

杉山 晴暉(通信・昭35、M昭37、D昭43) 今年の1月の後半ワシントン・ダレス空港に降りてあまりの寒さに震えあがりました。

空港の混乱で荷物のピックアップが終わった時は夜中の12時でレンタカー会社へのシャトルバスを待つ戸外は華氏0度(摂氏-17度)、そこへ風が吹いて耳がちぎれそう。これまで何回もモスクワやサンクト・ペテルブルグの冬に-25度を経験をしましたが毛皮の帽子などそれなりの備えをして臨んだので震えあがるということはありませんでした。今回は帽子までの備えは無く、かってロシアの人達が帽子が命を守ってくれると教えてくれたのを実感しました。訪問した会社の事務所でも停電の割当てがあったり、ホワイトハウスに近い博物館や美術館も臨時閉館で、車もまばらで町中が凍りついて息を殺した珍しいワシントンを体験しました。

(古野電気㈱専務取締役) 小さな会議室で大盛況で開催された会議の間も、会議室の外で雪が積もっていました。

植垣 俊幸(通信・昭38、D昭43) 今年の1月は、会議室で開催された会議の間も、会議室の外で雪が積もっていました。

このところ携帯電話基地局アンテナやパーソナルハンディホーン基地局の開発等移動体通信システムに関する事業に関与しております。光ファイバ通信システムの進歩の結果、通信と放送の融合が現実性を帯びてきましたが、マイクロセル・ピコセル無線通信システム等の移動体通信システムが急速に進みつつあり、パソコンシステムの小型化・高性能化・多機能化を見るにつけ、光ファイバ通信網、移動体通信網、パソコン端末が一体化したマルチメディア社会が今世紀中にも実現されることを実感する次第です。光通信システムと移動体通信システムの一体化と云うマルチメディア時代の実現に向けて残された時代をがんばろうと思っています。

(住友電気工業㈱ 支配人(情報通信事業部門)) 500人の中企業に成長したが、三菱電機での対応よりアドバイスを受けた結果、自社開拓のため、新規開拓のため、

杉山 和男(電気・昭39) 500人の中企業に成長したが、三菱電機での対応よりアドバイスを受けた結果、自社開拓のため、新規開拓のため、

卒業して早ちょうど30年になろうとしている。我が崇拜する織田信長はこの間既に一大事業を為し終えて死んでいる年令である。私はこの間ずっと一貫して情報を送る電線・ケーブルの開発・技術・製造の三部門に従事してきた。情報と言っても時代の変遷と共に変化して最初は電話を中心であり、次いでコンピューターが中心となり、最近はマルチメディアが中心となってきた。送る情報によって電線・ケーブルの基本技術も変化しており、マルチメディア通信は最近話題になっている新社会資本としての光ファイバネットワークが主役である。

従って最近は光ファイバケーブルの製造に従事しながら、来るべきマルチメディア時代とは一体どんな時代なのか色々と将来を夢想しつつ、他方では厳しい不況下の現実に戻ってリストラクチャリング更にはリエンジニアリングに忙しい毎日である。

(古河電気工業㈱ 光通信事業部 FCセンター長) 3年間は関西電力の総合技術研究所に勤務しております。

青海 恵之(通信・昭44、M昭46、D昭49) 3年間は関西電力の総合技術研究所に勤務しております。

この3年間は関西電力の総合技術研究所に勤務しております。その前は立命館大学に、さらにその前は電

電公社電気通信研究所と勤務先は変わりましたが、ほぼ一貫して光通信の研究に従事しております。電力供給事業に情報通信は不可欠であり、光ファイバケーブルの通信網も拡大しています。今後はますますその重要性が高まると考えられることから、昨年情報通信研究室が設置されました。私はその中の1グループで、大容量光通信の研究を行っています。

昨年の夏の話ですが、タイからの留学生であったプリュー氏が来日したことを期に、卒業以来始めての同窓会らしき集いをもちました。一通りの言葉の後はもう19年前の仲間でした。今度はもっと大勢でやりませんか。

(関西電力総合技術研究所)

私が重機と始めて見たのは今からちょうど十年前の大学院修士課程。卒業後は、大学院攻修側入

安川 交二（通信・昭45）

昭和50年にKDD入社の後、研究所で衛星通信関係の研究に没頭していましたが、昭和61年ATR設立準備会への参加を契機として、光衛星間通信やアクティブラレーアンテナなど当時としては新しい分野の研究に携わる機会に恵まれました。また、KDD研究所に復帰後も、研究企画、信号処理など研究面ではバラエティーに富んだ仕事を経験し、「専門は何ですか」と聞かれて返答に困るこのごろです。昨年8月ネットワーク計画部に移り主として研究開発に関わる諸々の仕事を担当していますが、最近ではマルチメディアに関心を持ってその発展を見極めていきたいなどと考えています。

(KDDネットワーク本部 ネットワーク計画部)

徳田 健（通信・昭50）

三菱電機に入社以来、通信用LSI、信号処理プロセッサ等、システムLSIの開発に従事し、学会活動や米国留学などを経験し充実した会社生活を送ってきました。昨年から、システムLSI開発研究所の企画グループに移り、システムLSIをメモリに継ぐ半導体事業の柱に育てるべく日夜開発戦力を練っています。情報機器のダウンサイジングを進め今やシステムオンチップと呼ばれるシステムLSIの設計は制御、演算処理、信号処理等のアルゴリズムまで遡る必要があり、まさにシステム技術とLSI技術の融合です。マルチメディア、パーソナル情報機器への応用など今後益々忙しくなりそうです。休日はゴルフ（打ちっぱなし）や高校1年の娘の勉強の手伝い（最近は苦痛）などで過ごしております。

(三菱電機(株) システムLSI開発研究所 開発企画グループ)

小野 恵嗣（通信・昭39）

東芝に入社して29年9ヶ月目に53才の誕生日を迎えるのを機会に、定年扱い退職をし、5年ほど前から出向していた関連会社に移籍となりました。今まで、注文を取るための提案作業が主でしたが、出向を機会に、今まで避けてきた、アプリケーション・ソフトウェア開発分野を本格的に勉強しています。技術革新の激しさと人間中心の作業に、以前の職場では理解が得られ難い理由がよく分かるようになりました。わが社は設立8年目の若い会社で、苦労の割には報われない場合も多いのですが、技術部門全員が意思疎通に心がけ、本音を大事にする風土醸成に心がけているのが出向者を含め好評なようです。今後は、日・米・欧のソフトウェア・ギャップの大きさに喘ぎながらも、世界を意識した文化・技術を開花させたいと考えています。

(東芝電波システムエンジニアリング(株) 第二技術部)

小嶋 敏孝（通信・昭41、M昭44、D昭47）

平成元年4月から大阪電気通信大学に勤務し、早や5年が過ぎようとしています。ご多分にもれず、小規模の私立単科大学にとって、大学冬の時代を乗り切るのは並大抵ではないようです。平成2年度から大学院前期課程、次いで4年度から同後期課程が設けられ、一応世間並の大学となりました。現在、研究室には学部4年生6人、3年生12人、大学院生3人をかかえています。平成5、6年度の学科主任を担当しており雑務に追われる日々が多い昨今であります。昨年、応用物理学科の研究室の大学院のセミナーに呼ばれて話を

する機会があり、久しぶりに母校を訪れました。新しい研究棟が建ち電気系の構成にも変化の兆しを感じた次第です。

（大阪電気通信大学 工学部 通信工学科）なりの備えをして講じたので震えあがるということはありませんでした。今回も震えは無く、かってロシアの人達が電子が命を守って（ひ園と計画）二度た振安

森谷 明弘（電子・昭42、M昭44、D昭47）

1985年に電子第三講座から新日本鉄（株）に中途採用入社してからはや9年が過ぎました。この間、良くも悪くも会社組織の中で生きていくための少しの知恵は身に付いたように思います。おもに化合物半導体の研究開発に取り組んできましたが、近年の平成不況の中、未知数より少ない方程式を解かねばならない様な、研究から事業へ筋道を付ける問題に頭をかかえている昨今です。同じ思いを持ちながら企業で研究開発に携わっておられる先輩後輩の皆様と大いに情報交換し、旧交を温めあえればと思います。

＊ 母校の先生方の御活躍を知るにつけ、うれしくまた懐かしく感じる今日この頃です。ますますの御発展を祈念致しますとともに相変わりませぬ御指導御鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。

（新日本鉄（株） エレクトロニクス研究所 半導体基盤技術研究部）

留学生の声

THANIYA LORLERTRATNA（通信工学専攻M1）

日本に来てもうすぐ6年になりますが、私は日本での生活に慣れたとはとても言えません。電車に乗ることや買い物をすることは日本人並にできますし、季節の変化は何度も経験しましたが、まだまだ不自由を感じています。どうすれば日本人の中に溶け込むことができるのでしょうか。

5年前に工学部の数少ない女子学生として大阪大学に入学したとき、大きなショックを受けました。どうしてだれも私の友達になろうとしないのでしょうか。当時、日本語もほとんど話せませんでしたし、友達は自然にできるものだと信じていましたので、そのまま何の努力もせずに時をすごしていました。明るい大学生生活に憧っていましたから、余計に寂しかったです。大学の友達と楽しく遊ぶ夢も数えきれないほどみました。日本に来たことを後悔して何度も國に帰ることも考えましたが、ここまで来れたのは寮の先輩や友達が支えてくれたことと自分の負けず嫌いの性格のおかげです。

卒業する前の一年間、研究室に入って日本人と接觸することも多くなりました。先生も先輩も同級生も少

人数で毎日会うことになり、あまり慣れていませんでしたから、最初は不安を感じました。挨拶や応答の仕方もわからず、いろいろ失礼なことをしたと思いますが、どうかお許しください。しかし、時々でも声をかけてくれる人がいてとてもうれしいです。最近になって、怖がらずに自分から声をかけることもできるようになり、時には長い会話ができる、それが私の幸せなひとときです。威張っているように見えるかもしれませんが、実は何を言つたらいいのかわからなくて、鈍い人間なのですから、声をかけて私を幸せにして下さい。

始まることから、私は電気工学専攻D2年生として、研究室で多くの実験を行ってきました。平成4年より小牧が担当する実験室で、主に雷電の発生メカニズムや、雷雲の構造などを研究しています。現在は、東京大学実験室、

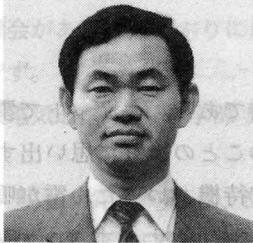
王道洪（電気工学専攻D2） が担当している研究室で、電気工学専攻D2年生として、実験室で多くの実験を行っています。

私が雷様と始めて付き合ったのは今からちょうど十年前の大学院修士課程の時である。ロケットで雷を落とすと言う目標のもとで中国中をあちこち駆け回り、実験を行ったことを昨日のことのように思い出しが、実験機器は非常に簡単で、ジープ一台で十分であった。当時の方針では、旅館で待機、いったん雷が鳴り出してから現場に移動するといった案配で、その距離は車で15分しかからないにもかかわらず、ロケット発射の準備などで20分もかかるため、雷を逃してしまうのがほとんどであった。特に夜の場合、山の上でなんにも見えない上、暴風雨にも見舞われるのが通常であり、かなりしんどいにもかかわらず、誘雷は最初二年間は成功に至らなかった。様々な苦労の末、ようやく三年目に誘雷に成功した。そして、私は修士課程修了後、中国科学院蘭州高原大気物理研究所に残り雷の研究を続けていくことになった。

当时代中国では、先進国への留学は若者にとって憧れの一つでありそのことも手伝い、私も91年7月に来日し、ここ大阪大学の電気電力講座松浦研で留学生活を始めることとなった。研究テーマは、レーザ誘雷。ロケットに代わり、ハイテクの先端、レーザを使い雷を落とすという研究であり、昨年冬世界初めてのレーザ誘雷野外実験に参加した。しかしながら、レーザ装置は大きい上、観測機器も多いので昔のロケット誘雷のように自由に移動できるわけではなく、泊まり込むことになった。食事、弁当、宿泊、山の上の観測室。日本人と一緒に泊まるのは私にとって非常に勉強になることであった。日本語の習得に役立つことはもちろんのこと、日本人の生活習慣も体験でき、興味は尽きなかった。でも、楽しいことばかりでなく初めの夜は恐怖だった。中国で、いくらも野外生活も経験したのに、何故か？日本語は不十分で、鬼とうまく交流できないと言う余計な心配なのか？または、うちの研究室の日本人学生から教えてもらった鬼のイメージは私のなじみの鬼と違うせいなのか？いずれでもない。実は、観測棟から離れること僅か10メートルの小屋で首つり自殺が一週間前にあったのだった。そのことに怯えきった私は一晩中寝つくことはできなかった。「何とかなる！」とは思ったものの、夜毎に幽霊（中国式ではなくなんと日本式の!!）の夢にうなされた私はやはりそこでの生活に慣れるのに暫くかかった。日本人の学生と一緒に観測したり、実験したり、そして、飲んだり、苦労もあったが、非常に楽しいものであった。あっと言う間に三ヶ月間立ち、撤収の日が近づいてきた。実験では貴重なデータも多数とったが、残念なことに暖冬の故か、なかなか雷様はご機嫌斜めのようであり、我々の未熟さもあり、誘雷には成功しなかった。しかし、失敗は成功の元。「来年こそは！」とやる気もひとしおの今日この頃である。

講座紹介

情報システム工学科 本講座は、平成元年に新設された情報システム工学科の第4番目の講
計画情報システム工学講座 座として、知能情報処理、シミュレーションなどを応用した工学、なら



びにビジネス、行政における計画策定および意思決定支援の技法および
システム構築に関する教育と研究を行うことを目的に、平成2年度に設
置され、鈴木胖教授が就任された。平成4年4月に鈴木胖教授が新設さ
れた社会情報システム工学講座へ移られた後、薦田が担当することになり
現在に至っている。現在、本講座には、薦田憲久教授、大川剛直助手
のほか、大学院生9名、学部卒研生7名、研究生1名が所属している。

本講座では、課題発見・解決案の発想・計画の立案・代替案の生成と
評価、等のシステム創造・構想活動に関し、情報・知識処理技術とシミ
レーション・最適化技術等のシステム技術を融合することによる支援・
代替の研究を行っている。

進行中の主な研究テーマは次の通りである。

(1) 発想支援に関する研究

仮説設定型発想支援方式の拡充と評価、情報システム計画における問題構造モデル作成支援システムへの応用を進めている。また、項目間の

関連を直接使わない別タイプの発想支援方式の開発も行っている。

(2) 概念情報処理に関する研究
「丸い感じの車」とか「ゆったりしたオフィスレイアウト」などの概念的
的な指定に合致するデザインや計画を類似事例をもとに作成する方式
を研究している。

(3) 定性シミュレーションに関する研究

システム計画においては定量的な情報が得られない状況で大凡の予測
を知りたい場合が多い。このような場合に有効な定性シミュレーション
方式に関する研究を推進中である。また、測定点が限定されるビル空調
設備の定性シミュレーションによる故障診断にも取り組んでいる。

(4) 知識型計画手法に関する研究

生産計画などの計画問題に対して、経験的知識を活用した実用的最適
解探索方式、それに適した知識獲得方式等を開発中である。また、知識
支援による生産計画変更方式の研究も合わせて行っている。

(5) 知識獲得ならびに学習に関する基礎研究

様々な対象領域に応じて適切な知識獲得を実現する対話型知識学習シ
ステムの開発、ならびに既存知識を積極的に利用することにより少数の
例題をもとに新しい知識の学習が可能な帰納推論に関する基礎的研究を行
っている。

教授 薦田 憲久

評価、等のシステム創造・構想活動に関し、情報・知識処理技術とシミ
レーション・最適化技術等のシステム技術を融合することによる支援・
代替の研究を行っている。

進行中の主な研究テーマは次の通りである。

(1) 発想支援に関する研究

仮説設定型発想支援方式の拡充と評価、情報システム計画における問題構造モデル作成支援システムへの応用を進めている。また、項目間の
関連を直接使わない別タイプの発想支援方式の開発も行っている。

(2) 概念情報処理に関する研究
「丸い感じの車」とか「ゆったりしたオフィスレイアウト」などの概念的
的な指定に合致するデザインや計画を類似事例をもとに作成する方式
を研究している。

(3) 定性シミュレーションに関する研究

システム計画においては定量的な情報が得られない状況で大凡の予測
を知りたい場合が多い。このような場合に有効な定性シミュレーション
方式に関する研究を推進中である。また、測定点が限定されるビル空調
設備の定性シミュレーションによる故障診断にも取り組んでいる。

(4) 知識型計画手法に関する研究

生産計画などの計画問題に対して、経験的知識を活用した実用的最適
解探索方式、それに適した知識獲得方式等を開発中である。また、知識
支援による生産計画変更方式の研究も合わせて行っている。

(5) 知識獲得ならびに学習に関する基礎研究

様々な対象領域に応じて適切な知識獲得を実現する対話型知識学習シ
ステムの開発、ならびに既存知識を積極的に利用することにより少数の
例題をもとに新しい知識の学習が可能な帰納推論に関する基礎的研究を行
っている。

卒業する前の一年間、研究室に入ることで、多くの知識を得ることができた
うえに、知識を活用して問題を解決する能力が身についたと感じています。

この一年間で、知識を活用して問題を解決する能力が身についたと感じています。
知識を活用して問題を解決する能力が身についたと感じています。

この一年間で、知識を活用して問題を解決する能力が身についたと感じています。
知識を活用して問題を解決する能力が身についたと感じています。

この一年間で、知識を活用して問題を解決する能力が身についたと感じています。
知識を活用して問題を解決する能力が身についたと感じています。

一般電気工学講座



教授 小牧 省三
(通信・昭45)

本講座は、工学部電気系以外の学科の学生に対して電気工学についての教育と実験指導を行うことを目的として、昭和40年に設置された。初代の教授には藤井克彦教授（現在名誉教授、神戸製鋼所電子技術研究所長）が就任され、昭和47年より鈴木伸教授（現在情報システム工学科社会情報システム工学講座）、昭和63年からは辻毅一郎教授（現在電気工学科組織工学研究講座）が担当されてきた。平成4年9月より小牧が担当し、現在の講座職員は、石田智明助手、塚本勝俊助手、岡田実助手、藤井伸幸技官、岩田喜一技官、岸田宏美事務補佐員の合計7名という実験指導の稼働を考慮した大所帯となっている。

当講座は、本年で開設以来30周年という節目の時期を迎えており、この間、純粋の電気技術と少し趣が異なる研究すなわち社会・人間というものを対象にした研究活動が継続されてきている。これは、電気系以外の学生への教育を通じ、広く社会・人間の動向と関わる機会に恵まれたことが一つの要因になっているものと推測している。

藤井教授は制御理論の研究に端を発してはいるが、制御という一分野にとどまることなく、人体・生体という複雑なシステムを制御という目でとらえ、新しい研究分野を開拓されている。さらに、これに続く鈴木・辻教授らは大規模なシステムの動作解析という研究を、社会におけるエネルギー需要のモデル化・分析という観点で発展させ、行政やエネルギー供給会社からも注目される研究を展開された。

担当が変わった現在も、上述したような当講座の特徴を生かした研究を異なった専門分野で継続している。具体的には我々の専門分野である「情報通信」と社会・人間という接点に関係する研究を展開している。当面の研究課題は以下の通りである。

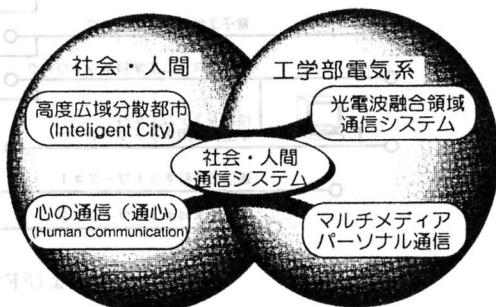
1. 都市への人口集中と通信の役目：光電波融合領域通信システム

人間社会は人と人の協調を前提に成立しており、生産性の向上・生活の快適性向上のため都市に人口が集中するような構造になっている。通信という手段は人の集中を分散させる効果を有しており、大都市で見られ始めているような過度の人口集中をさける手段として重要な役目を担っている。特に当講座で研究を進めている光・電波融合領域通信システムは電波をそのままの形で光ファイバに閉じこめて遠距離まで伝送できるため、電波の分配容易性と光ファイバの長距離伝送可能性という特徴を相乗的に組み合わせることが可能となり、通信の広域分散に寄与できるものと考えている。

2. 人と人、心と心の通信（通心）：マルチメディアパーソナル通信

通信の最終目標は符号という無機的な情報を相手に伝えるという事ではなく、人と人、心と心が通じるということであろう。このためには、人間の五感を介したコミュニケーションが必要となるが、電気通信はいまだ聴覚という最も初步的な段階にある。現在、研究を行っているマルチメディアパーソナル通信は、音声の次のステップを無線（移動）で実現することを目指すものであり、具体的には適応変調・マルチキャリア伝送を駆使した高速移動通信、ディジタルテレビ放送などを現在のターゲットとしている。

現在、新しい研究に着手したばかりの講座であり、また大学院改革が進められている段階でもあり、長期的な流れにおいて若干の不明確な要素もあるが、先輩の残された講座の特徴を生かして研究に推進したい。



母校のニュース

聖書学工及電算系

大阪大学総合情報通信システム(ODINS)

平成5年度新社会資本整備事業の大型補正予算の処置で、待望の情報通信ネットワーク「大阪大学総合情報通信システム(ODINS: Osaka Daigaku Information Network System)」が実現することになった。本ネットワークは、吹田・豊中両キャンパスの各部局間を結ぶ超高速の基幹ネットワークおよび各部局内における支線ネットワークから構成されている大規模 LAN(構内網)システムである。基幹ネットワークには、150 Mbps、および、600 Mbpsで動作する ATM(非同期転送モード)交換機を中心とした ATM-LAN 技術を採用している。ATM-LAN 技術は、次世代情報通信システムのための最有力の先進的ネットワークアーキテクチャとして注目され、各所で盛んに研究・開発が行われてきたが、実用ネットワークとして ODINS のように大規模に運用されるのはおそらく世界初の試みである。

大阪大学工学部電気系では、従来4学科のネットワークをバックボーンネット(10 Mbps)で接続し、情報システム工学科からの構内回線(64 Kbps)を経由して、大型計算機センターならびに学外へ接続していた。この度の ODINS 構築とともに、このバックボーンネットを光ファイバを媒体とした 100 Mbps で動作する高速 FDDI ネットワークに更新した(図1参照)。その結果、大型計算機センターを含めた電気系外部への接続が 1,000 倍以上高速化され、従来低速かつ不安定な回線での利用を余儀なくされていた大型計算機センター内のスーパーコンピュータの利用が促進され、ネットワークを介してのマルチメディア情報の処理も可能になった。また、電気系事務室についてもネットワークに接続し、事務室内のパーソナルコンピュータから同様な形態で外部へアクセスできるようになった。

今後、文献検索などの各種データベースの拡充、さまざまな情報サービスの提供などにより、格段に充実したキャンパスネットワークを構築する予定である。

(西尾章治郎(情報システム)記)

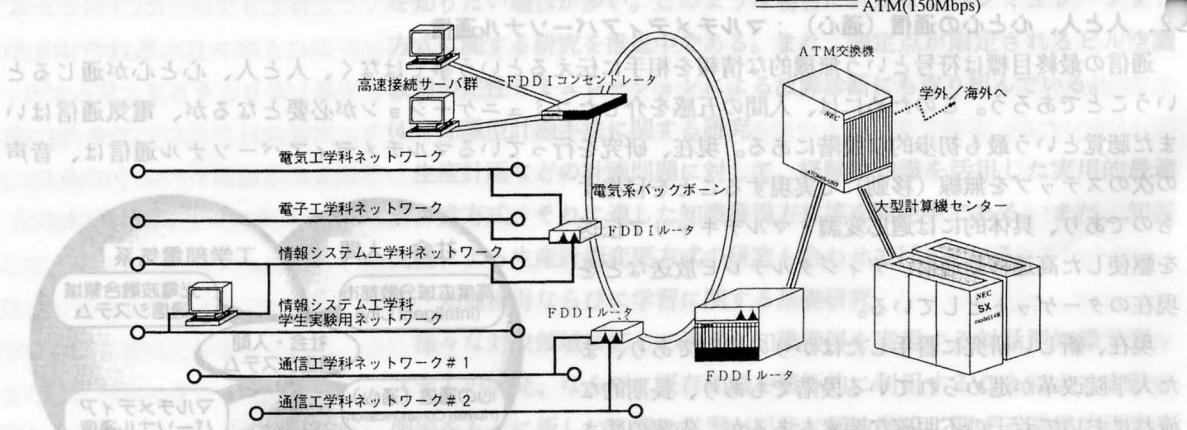


図1 ATMおよびFDDIで構成された高速ネットワーク

文部省特別設備“半導体ダイヤモンド”

ダイヤモンドは宝石の代表であるが、またハイテク材としても極めて優れた資質をもつ。

これは、地球上に存在する固体物質の中で最高の硬度を有し、また、電気的には絶縁体であり、熱伝導率も最も高い。また、ほとんどあらゆる波長の光を透過させる光学的特性をもつ。その他、数えあげれば限りがない。

更に重要なことに、この物質は、現在超LSIで代表されてエレクトロニクスで主役をつとめるSi(シリコン)半導体の名実とともに兄貴分となり得る能力も有する。その広いバンド・ギャップ(5.5eV)、高い電子と正孔移動度、耐放射線性、耐イオンバリヤ性などは、これから求められる半導体の条件そのものである。

従って、ダイヤモンドを多くの用途に使用するという強い欲求があるのは当然である。だがその前提是、この物質が人工的に合成、または、作成可能のことである。

さて、ダイヤモンドは炭素(C)原子の結合からできている。厄介なことに、C原子を互いに結合させるとすぐにダイヤモンド結晶になるかというと、そうではない。我々の住む地球上は、1気圧、常温(20°C前後)の世界である。この環境下でC原子が結合した結晶はダイヤモンドにはならず、鉛筆芯と類似のグラファイト(黒鉛)となる。

一般に、ダイヤモンド結晶となるためには摂氏1500度以上の高温と6万気圧という高圧、すなわち、地下100kmと同様の環境の下でC原子を結合せしめる条件が必要である。これを正攻法的に実現したのが、高温・高圧合成ダイヤモンドである。しかし、このダイヤモンドは粒状で半導体として使えない。

半導体材料としての人工ダイヤモンドは(結晶性が良く、格子欠陥の少ない)高品质、高面積で低温作製が要求される。そこで、この作製には、正攻法でなく発想を変えたアプローチが必要となる。

このテーマに取り組んだ筆者の研究室では、CH₄などの炭化水素と水素の混合ガスのプラズマに磁場を外部から加えることにより、プラズマをうまくコントロールして高面積ダイヤモンド薄膜の低温(100°C以下)・低圧(1万分の1気圧)の作製に世界で初めて成功した。

また、白藤教授の研究室は、このダイヤモンドの電気的性質に関して、多くの業績を示した。

これらの研究努力が文部省の認める処となり、わが電気系に平成5年度予算約2億5千万円にて“半導体ダイヤモンド”に関する特別設備が設置されることとなり、現在その作業が進行中で、やがて皆様にご披露できる予定である。

筆者と白藤教授の両研究室がお世話をさせて頂くが、この活用により世界に誇り得る立派な研究成果が電気系より生まれるべく瀬戸内会の皆様のご協力とご支援を心よりお願い申し上げる次第である。

(平木昭夫(電気)記)

(和歌山県立工業高等専門学校)白藤昌也

参加学生 41名 (1.1.0平)

(1.1.0平)田嶋千恵子=岡 木浜

電子工学科 司 雄

3月6日 (1.1.0平)田嶋千恵子=昌井田原

3月7日 (1.1.0平)太田勝也=白藤昌也

3月10日 岩本史也 (承認3.0平) タ

(和歌山県立工業高等専門学校)白藤昌也=白藤昌也

引率者: 木浜千恵子 (1.1.0平) 教授

(1.1.0平)田嶋千恵子=木原 木山

参加学生 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

司 雄

3月14日 (1.1.0平)田嶋千恵子=木原 木山

3月15日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月16日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月17日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月18日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月19日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月20日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月21日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月22日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月23日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月24日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月25日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

3月26日 (1.1.0平)田嶋千恵子=白藤昌也

教室情報

▼平成 6 年度四学科長教授

平成 6 年度の四学科長（専攻幹事）は下記のとおりです。

電 気 白藤 純嗣 教授
通 信 前田 肇 教授
電 子 浜口 智尋 教授
情報システム 薦田 憲久 教授

▼電気系人事

電 気
堺 一男=学内講師から講師に昇任
(平 6.1.1)

山本賢司=教務員から助手に昇任
(平 6.2.16)

伊瀬敏史=学内講師に昇任 (平 6.3.1)
木村紀之=辞職 (大阪工業大学助教授)
(平 6.3.31)

山本賢司=転任 (鈴鹿工業高等専門学校講師)
(平 6.4.1)

舟木 剛=助手に採用 (平 6.4.1)
通 信

池田博昌=教授に採用 (平 6.3.1)
松原正則=辞職 (岡山理科大学教授)
(平 6.3.31)

榎原博之=辞職 (関西大学講師)
(平 6.3.31)

山本 幹=学内講師に昇任 (平 6.4.1)
伊藤義道=助手に採用 (平 6.4.1)

電 子
春名正光=医学部教授に昇任 (平 6.4.1)
藤村昌寿=助手に採用 (平 6.4.1)

潮 俊光=助教授に採用 (平 6.4.1)
情報システム

李 彦=助手に採用 (平 5.5.1)

山本 文=辞職 (平 6.3.31)

岡山聖彦=転任 (奈良先端科学技術大学院大学
情報科学研究科助手) (平 6.4.1)

大川剛直=情報処理教育センター助手から情報
システム工学科助手へ配置換
(平 6.4.1)

山井成良=兼任助手（情報処理教育センター助
手）(平 6.4.1)

三浦克介=助手に採用 (平 6.4.1)

春本 要=助手に採用 (平 6.4.1)

滝根哲哉=講師 (京大から昇任) (平 6.4.1)

▼母校の教壇に立つ本会会員

平成 6 年度には次の方々が非常勤講師として後
進の指導にあたられます。

・電気工学科『パワーエレクトロニクス』

三菱電機(株) 産業システム研究所

パワーエレクトロニクスマネージャー

打田良平 (電子・昭 42)

・電気工学科『特別講義』

関西電力(株) 取締役

山崎吉秀 (電気・昭 33)

・電気工学科『半導体工学』

三菱電機(株) 熊本製作所所長

中野隆生 (電気・昭 37)

・通信工学科『システム工学』

(株)日立製作所 映像メディア研究所 所長

渡部篤美 (通信・昭 38)

・通信工学科『特別講義』

富士通(株) 常務理事

パーソナルビジネス本部 副本部長

神田泰典 (通信・昭 35)

・通信工学専攻『特別講義』

日本電気(株) 支配人

林 宏美 (通信・昭 38)

・電子工学科『光電デバイス工学』ならびに

通信工学専攻『特別講義』

日本通信電話(株) NTT 伝送システム研究所

光通信研究部 主席研究員

中川清司 (通信・昭 43)

・電子工学科『特別講義』

三菱電機(株) 産業システム研究所 所長

田畑則一 (電気・昭 36)

・電子工学科『特別講義』

(株)日立製作所 システム事業部 事業部長

村井忠雄 (電気・昭 36)

- ・電子工学専攻『計算機特論』
松下電器産業(株) 映像音響情報研究所
画像情報グループ主担当
鷺島敬之(電子・昭41)
- ・電子工学専攻『集積回路工学』
三菱電機(株) ULSI開発研究所
メモリ設計技術開発部第2グループマネージャー
藤島一康(電気・昭48)
- ・電子工学専攻『集積回路工学』
(株)東芝 電子事業本部長付
(ディスプレイ・テクノロジー(株)
代表取締役社長
島 亨(電気・昭36)
- ・電子工学専攻『結晶工学』
松下電産(株) 中央研究所 部品材料基礎研究所
第1研究室 室長
平尾 孝(電子・昭40)
- ・電子工学専攻『半導体工学持論』
松下電子工業(株)
技術開発推進本部 電子総合研究所 所長
加納剛太(電気・昭36)
- ・電子工学専攻『特別講義 I』
奈良先端科学技術大学院大学教授
藤原秀雄(電子・昭44)
- ・電子工学専攻『特別講義 I』
日本電信電話(株) NTT情報通信処理研究所
知識情報処理研究部 部長
河岡 司(通信・昭41)
- ・電子工学専攻『特別講義 II』
三菱電機(株) 熊本製作所 副所長
安岡晶彦(電子・昭39)
- ・電子工学専攻『特別講義 II』
(株)日立製作所 計測器事業部 主任技師
野村節生(電子・昭40)
- ・情報システム工学科『ソフトウェア工学』
シャープ(株) 取締役 技術本部 副本部長
河田 亨(電子・昭41)
- ・情報システム工学科『システムプログラム』
(株)日立製作所 ソフトウェア開発本部
関西開発センター 関西設計部 副部長
戸川明彦(電子・昭44)
- ・情報システム工学専攻『特別講義 II』
三菱電機(株) 中央研究所

システム基礎研究部 部長
武田捷一(通信・昭40)

▼平成6年 学生見学旅行 電気工学科

- 3月22日 (株)東芝 (浜川崎工場)
- 3月23日 (株)日立製作所 (中央研究所、半導体事業部)
- 3月24日 富士電機(株) (東京工場)
横河電機(株) (エレクトロニクス研究所、システム技術部他)

引率者: 白藤純嗣教授、杉野 隆助教授

参加学生 44名

通信工学科

- 3月9日 (株)日立製作所 (映像メディア研究所、情報通信技術センタ)
- 3月10日 松下通信工業(株) (佐江戸地区事業所)
- 3月11日 キヤノン(株) (下丸子本社)

引率者: 前田 肇教授、中野秀男助教授

参加学生 41名

電子工学科

- 3月8日 日本電装(株)
- 3月9日 (株)日立製作所 (小田原工場)
- 3月10日 (株)東芝 (研究開発センタ)
日本電気(株) (中央研究所)

引率者: 浜口智尋教授、谷口研二助教授、

森藤正人助手

参加学生 42名

情報システム工学科

- 3月9日 横河電機(株) (本社工場)
- 3月10日 (株)東芝 (柳町工場、システムソフトウェア技術研究所)
- (株)日立製作所 (情報通信事業部、情報システム開発本部、ビジネスシステム開発センタ)
- 3月11日 日本鋼管(株) (京浜製鉄所、エレクトロニクス研究所)

引率者: 薦田憲久教授、大川剛直助手

参加学生 40名

会員の方々のご活躍

山中千代衛名誉教授が 電気学会功績賞受賞ならびに名誉員推薦

山中千代衛名誉教授（電気・昭23）は、平成5年5月27日「レーザー技術ならびにレーザーエネルギー研究開発に対する貢献」により（社）電気学会功績賞を受賞され、また、永年にわたる電気学会会員としての学会の発展に対する貢献により名誉員に推薦されました。

熊谷信昭前総長が

科学技術会議議員に就任

熊谷信昭前総長（通信・昭28旧）が平成5年12月25日付けで科学技術会議議員に就任されました。科学技術会議は、日本の科学技術行政の基本的方向について審議する機関であり、内閣総理大臣が議長を務める。議員は10名で、大蔵大臣、文部大臣、経済企画庁長官、科学技術庁長官、日本学術会議会長、学識経験者5名から構成されている。これらの議員は特別職公務員で、閣議決定と国会の承認を必要とする。大阪大学関係としては初めての就任である。

の場 健東京理科大学教授が

IEEE フェローを受賞

の場 健東京理科大学教授（通信・昭29、基礎工学部電子応用工学科）が、「高度なテレビ技術の医用パターン認識への応用に対する貢献」により、IEEE（米国電気電子学会）の最高名誉称号であるフェローを1993年1月1日付けで受賞されました。

岡田明之氏が

科学技術庁長官賞を受賞

ダイヘン（株）専務取締役岡田明之氏（電気・昭30）が、平成5年4月14日平成5年度科学技術庁長官

賞（科学技術功労賞）を受賞されました。この表彰は科学技術と産業の進歩発展に貢献した発明者または技術者で、科学技術の普及啓発に貢献し、また優秀な国産技術の育成に貢献した者に贈られるものである。今回の受賞は、高周波インバータ制御式高性能アーク溶接機の開発、育成が評価されたものである。

児玉慎三教授が

計測自動制御学会フェロー受賞

児玉慎三電子工学科教授は、平成5年8月5日（社）計測自動制御学会からフェロー称号を授与されました。この称号は各種の活動を通じて、計測自動制御学会の関与する分野の学問技術の発展に顕著な功績のあった会員に授与されるものである。

長谷川晃教授が

郵政省志田林三郎賞

ならびに服部報公賞を受賞

長谷川晃通信工学科教授（通信・昭32）は、平成5年6月1日、光ソリトンを高速大容量通信に用いる技術に顕著な功績をあげたことに対し、郵政省志田林三郎賞を受賞されました。この賞は、平成5年郵政省が設立した賞で、電気通信技術の基礎的研究分野における先端的、独創的な研究活動により、電気通信の発展に対する貢献の可能性のある優れた研究成果に対して贈られるものである。

また、平成5年10月8日には、非線形現象の理論的解析および通信工学への応用に貢献したことに対し、服部報公賞を授与されました。この賞は、服部時計店の初代社長服部金太郎翁が昭和6年に設立した「一般学術の特殊なる研究成果」に贈られる賞であり、日本で現存する最も歴史の古い賞といわれ、菊地正士氏、仁科芳雄氏などが受賞者に名を連ねて

いる。

中井貞雄教授が エドワード・テラー賞を受賞

レーザー核融合研究センター長中井貞雄教授（電気・昭36）は、平成5年10月26日、米国カリフォルニア州モントレー市で開催されたレーザー相互作用国際会議において第2回エドワード・テラー賞を授与されました。受賞対象は「レーザー光を用いた高エネルギー密度物質の基礎科学研究と制御核融合研究に対する先駆的研究及びその指導力」である。第1回（1991年）の山中千代衛名誉教授に引き続

いての受賞である。

○池田雅夫神戸大学教授（通信・昭44、工学部情報知識工学科）は、平成5年8月5日、「走行車両の動的質量測定」により計測自動制御学会論文賞・蓮沼賞を受賞。

○近藤晴房氏（通信・昭58、三菱電機株）は、「A Fully Integrated 6.25% Pull-in Range Digital PLL for ISDN Primary Rate Interface LSI」により電子情報通信学会論文賞を受賞。

○加藤義章教授（レーザー核融合研究センター）、三間國興教授（レーザー核融合研究センター）が、平成5年11月3日、米国物理学会プラズマ物理学賞を受賞。受賞対象となった研究業績は、レーザー光均一化技術の開発ならびにプラズマ不安定性とペレット圧縮の制御である。

○中島信昭助教授（レーザー核融合研究センター）が「レーザー誘起化学反応とその応用に関する研究」により、平成5年10月2日、第7回光化学協会賞を受賞。中には卒業後初めて大学に帰らる方の多い方々、東会員の方々の受賞につきましては、調査が不十分で記載もれが多いと存じます。何卒ご容赦下さい。

なお、受賞につきましては、隨時湯電会事務局にご連絡下さるようにお願い申し上げます。

同窓会だより

大学を卒業して40年たてば

昭和28年（1953）春、旧制最後の卒業生として学窓を巣立ったわれわれは、卒業後40年の星霜を生きてきたことになる。平成5年5月21日卒業40周年の同窓会を有馬温泉の兆楽で開催した。

われわれが卒業した昭和28年当時は、戦争の被害からようやく立ち直り、企業が新卒業生を計画的に採用し始めた頃であった。しかし、この年は旧制卒業生に加えて、新制大学の卒業生も同時に社会に出た年で、就職戦線は困難を窮めた。当時の主任教授（故七里義雄先生）は随分ご苦労された。しかし、われわれの学年はかろうじて日立2、三菱2、東芝1、松下2、明電舎2、大阪変圧器2、関西電力3、阪神電鉄1、京阪電鉄2など電気工学科の卒業生としては順当に企業に入社することができた。4月に入って卒業生は勇躍任地に散って行った。しかし、当時は今と異なった食糧不足、物不足の時代で、外で食事をする時は外食券が必要であり、外国産の米にも随分お世話になった。

卒業後、われわれは旧交を温めるために5年毎に同窓会を企画した。浜松の旅館、湯の山温泉、琵琶湖ホテル等場所を変えて同窓生が集まった。同窓会毎に学生時代の懐かしい思い出を語り、近況を交歓し合った。5年毎の同窓会を振り返ると以下のような経過をたどっている。始めの頃は経済的に貧しかったため、企業の保健会館等を利用した。次第に豪華になり遠出するようになった。卒業20年目までは皆夢中で働いている有様だった。30年目頃が最盛期で、「次の同窓会は海外でやろう。」といった話が出た。しかし実現はしなかった。

卒業25年目頃から同窓会と同時にゴルフコンペが併催されるようになった。浜松シーサイドカントリーで故吹田先生に参加していただき、名演技を披露していただいたのは悲しくも懐かしい思い出であ

る。毎回山口先生、西村先生に参加していただいている。山口先生とわれわれとは約30才の年齢差があるので、先生のグロススコアより沢山たいたい者は罰金を支払うこととし、皆必死になってプレーしたこともあった。高年齢になってからゴルフに熱中し出した者もあり、熱心に世話ををする者がいて、毎年2回コンペを開催して現在に至っている。山口先生寄贈による山口杯の争奪戦となっている。

卒業40周年の同窓会では今までの集まりと少し趣が異なってきた。かっての壮年時代の旺盛な食も影をひそめ、気宇壮大な話の代わりに孫の話がでるようになった。卒業時に入社した会社にそのまま勤務している者は40人中2名のみとなり、他は職場を変えた者、あるいは独立した者等色々である。なお、われわれのクラスの物故者は、卒業後数年で逝去した長山君一人で、その他の者はそれぞれに元気である。同窓生一同順次近況報告をしたが、身近な話題が多く、往年の覇気が感じられなかったためか、最後に山口先生から、「かっての秀才がどうしたことか。己れの信ずる道を、信念を持って敢然と進め。」と一喝を頂戴した。山口先生、桜井先生は何時までもお元気である。

なお、40年たっても同窓生の顔は卒業当時の面影を残してあまり変わっていない。もちろん、肥った者や、髪が薄くなった者は別であるが。卒業当時とあまり変わっていないということは、当時から身体的成长が止まっているためだろうか。参考のために40周年同窓会の際の記念写真を掲載する。なお、長年苦労を共にしてこられた奥様も共に集まるよう案内したが、参加された女性は安井晴子女史唯一人であった。古き亭主関白の良き時代を40年ひきづっているのだろうか。



同窓会記念写真

前列左から 山本 雅夫、頬富 達雄、安井 晴子、
櫻井 良文、山口 次郎、杉山 修一、
廣井 恭一
中列左から 安田 利孝、関 空童、桜田 晴住、
佐谷 裕、藤井 克彦、後藤 業明、
上西 康晴
後列左から 川渕 章、稲荷 真名、的崎 亨、
西川 功一、長田 恒一、石川 俊彦、
西馬 重幸
(藤井克彦 (電気・昭28旧) 記)

昭和38年電気卒(三八会)30周年同窓会

5年毎に開いてきました三八会の30周年同窓会が昨年7月10日(土)、11日(日)にかけて、西村、藤井の両先生のご出席を得て開催されました。

回は有馬温泉の有馬御苑に場所を設定し、母校の見学会が持たれました。出席者は前回とほぼ同数の25名で、約半数が大学の施設見学に参加しました。
◎母校では、電気系建物の屋上に上がり吹田キャンパスを一望すると共に新築なった情報システム工学科とレーザー核融合研究センターの「激光XII号」レーザー核融合実験装置、原子力工学科の14 MeV強力中性子発生装置「オクタビアン」を見学しました。中には卒業後初めて大学に来たという人もおり、東野田学舎と比べ見違えるほど広くなったキャンパスや施設、研究規模の発展に大きな感銘を受けられ、

大変好評でした。

有馬温泉では最上階の見晴らしの良い大浴場で日頃の仕事の垢を洗い落とし、美酒美食に舌鼓を打ちながら、懐かしい西村先生、藤井先生のお話を伺うとともに、大学に近況説明を聞き、阪大工学部の在り方、仕事のこと等、学生時代の気分になって、夜遅くまで話に花が咲きました。ただ、今回も宮仕えの悲しいところで、土曜出勤で時間になつても抜けられず出席出来なくなつた方がおられたのが残念でした。

皆が一同に集まる会は、従来と同様5年毎に開くが、これからは移動も多くなると思われるので、それぞれの地区で適宜開催することを申し合わせて散会しました。最後になりましたが、お世話戴きました幹事の方々に感謝致します。

(山中龍彦 (電気・昭38) 記)



通信昭47年卒「21世紀に向けての同窓会」

いつのまにか21年の歳月が経っていた。この間、同窓生もそれぞれの分野で活躍し、日々多忙な暮らしを送ってきただろう。そんな中で、昔のことをふと思い出す余裕が出てきたのだろうか。同窓会を開いてはどうかと言う声が聞こえ始めたのは、ついこの間のことである。自然発生的に聞こえ始めたそんな声に従って開いた同窓会が「21世紀へ向けての同窓会」である。自然発生的であるから、10周年とか20周年とかにはこだわることなく、「卒業21周年同窓会」であり、その語呂合わせで「21世紀へ向けての同窓会」と名付けた。

「21世紀へ向けての同窓会は」は1993年10月30日に京橋「ト一（といち）」で行われた。当日は、滑川敏彦先生、熊谷信昭先生、中西義郎先生をお迎えし、16名の同窓生（伊藤、大野、海尻、木内、小松、塙野、四方、田平、徳田、中野、西沢、林田、早瀬、廣中、福永、森下）が参加した。21年の歳月は、それなりに我々を変化させるには十分であったが、学生時代の「俺、おまえ」の関係を変えるとともに、平凡な表現ではあるが、和気あいあいの雰囲気が時間を経つのも忘れさせた。先生方から、次は「21世紀を迎えての同窓会」を開いてはどうかとの提案があり、参加者一同、2001年に再び3先生を迎えてこの場に集うことを約して散会した。

（小松雅治（通信・昭47）記）



昭和48年卒電気系同窓会

平成5年11月20日（土）、昭和48年電気系卒業生の同窓会が、大阪市北区の電気クラブで開催された。これまで各学科ごとに気の合った仲間同士が集まって、酒を酌み交わすことはあった様だが、今回のように正式に電気・通信・電子の三学科合同の企ては、全く初めての事であった。同窓会の主題は、「卒業20周年を祝う」事であり、それぞれの職場で責任ある立場で奮闘中の「級友を互いにねぎらう」事であった。幸い当日は天候にも恵まれ、卒業当時色々と教えを頂いた、熊谷前阪大総長、滑川名誉教授、中西名誉教授、塙名名誉教授、児玉教授、及び寺田教授の6名もの恩師、紅一点安井晴子女史（電気系図書室で非常にお世話になった事を覚えておられる級友も多かったと思うが）にご出席を頂いた。そして幹事団が20年と云う時の流れから心配した級友については、40名を越す出席者を迎えることが出来、予想以上の盛況であったと満足している。20年にして初めての同窓会と云うことで、幹事団一同で腐心したのは、「どうすれば勤務先が大阪近郊以外の級友にも数多く参加していただけるか？」と云う難問の解決策である。そして「土曜日の午後の早い時間なら、日帰りするも一泊するも自由で、多くが出席出来るであろう。」をその解答として選んだ。その結果出席できた級友の総数から見て「まずは及第点！」と喜んでいる次第である。

さて同窓会は2時に開会、まず熊谷先生の祝辞頂き、引き続いての滑川先生の「乾杯」のご発生の後、歓談に入った。歓談中適宜恩師を指名させていただいて、「激励」のお言葉を頂いたり、「近況」のご様子を伺ったりしながら、（不謹慎かなと思いつながらも）痛飲、思い出話に花を咲かせる級友あり、日頃の憂さを晴らす級友ありで、和気藹々の2時間半であった。僅か2時間半の時間ではあったが、学生時代に戻った気分で楽しむことが出来たことに加え、出席いただいた諸先生が、全員お元気そうであったことが、卒業生一同にとって何よりの喜びであっ

た。そしてまた久しぶりに母校の近況を聞いた級友にとって、電気系三学科が、情報システム工学科を加え電気系四学科に発展していることが驚きだったようである。

月並みで同窓会が待たれるたび判で押したように云われることであるが、一目見て「あいつだ！」と分かる級友、髪の毛がすっかり薄くなつて「あの二枚目が！」と時の流れを再認識させられてしまう級友、そんな級友たちと別れを惜しみながら、そして皆の健康を祈りながら、多分50才を祝う会となるであろう次回を約束して、電気系三学科合同卒業20周年記念同窓会を閉会した。最後にこの会に出告して下さった恩師の諸先生方に感謝し、ますますの御健在を祈念して報告とする次第である。

(江崎善一郎(電気・昭48)記)

東原(京都本日) 関由伸中 (車商忠蔵) 順一郎林西
(業務器部不^レ大津田未 (車商忠蔵) 順一郎林西
平田稔人(西日本) 谷藏 (車商忠蔵) 順一郎林西
(学部朝鮮大大工東) 宮原 (車商忠蔵) 順一郎林西
 宏智口田 (車商忠蔵) 順一郎林西
 (大英語音翻訳科博士課程) (車商) 順一郎林西

電気工学専攻(3名)

美 新(未定) (電気工学専攻)
李 廉 (大阪大学工学部) (電気工学専攻)
 情報システム工学科助手)

井健介(未定) (電気工学専攻)

編集後記

平成5年度は、自民党政権から連立政権への政権交代があり、東西冷戦終了後の激動が続いています。大学においても、平成5年9月に医学部付属病院が中之島から吹田キャンパスへ移転しました。また、平成6年4月より教養部が廃止され、新しく作られた全学共通教育機構が共通教育にあたることになりました。また、大学院重点化のための工学部および工学研究科の改革の議論も活発です。設備面でも、母校のニュースに紹介されていますように全学の計算機ネットワーク ODINS が完成しました。

電気会でも、昨年度の九州支部、四国支部の設立に続き、中国支部が発足しました。また、学年毎の同窓会も活発に開催されているようですが、記載漏れがございましたら、何卒ご容赦下さい。

この15号では、表紙の色だけは毎号区別できるようにピンクに変えましたが、それ以外は従来の方針を踏襲しました。また、山口元会長には前号の「電気会昔ばなし」に引き続き「電気会ゴルフ会の今昔」をご執筆頂きました。

この会報「電気会」は、母校と会員を結ぶ大きな掛橋の一つであります。会員の皆様のご意見を反映した会報作りをしたいと思いますので、ご意見、ご要望がございましたらどしどしお寄せ下さい。同窓会や受賞の報告などもお願い致します。

最後になりましたが、ご多用中にもかかわらず、原稿の執筆をお引き受け頂いた皆様方に心よりお礼申し上げます。

(編集幹事：薦田憲久、塩沢俊之)

大東本森	生 外喜	新井千百	北野真 本野	谷口 青吉	峰澤理治	西村谷武	近大野 謙喜
大豊 兼時	四条 選典	宮山 入	久慈 中山 六郎	藤原 信高	幸村木	南澤本森	生 順一 宮吉
井本 義人(生野)	伊藤林小	鶴見本山 道道	田嶋田口	吉永岡 順	西村木	吉澤井野	鶴田重
川内真山鉄	田中崇	吉田本山 今治	西尾貴田	石曾士和(明星)	鶴田義	吉澤井野	鶴田空
井上 喜千	鈴一 韶	鶴見吉善	田嶋	木曾	吉澤井野	大分田	鶴見良高
牛島貴田雄	奈良田	吉田吉	田嶋	吉澤	吉澤井野	徐裕	吉澤井野
猪口明博(明善)	田中	吉田吉	一晋口理	吉澤	吉澤井野	六甲	吉澤井野
今村 駿志(甲南)	猪口明博(明善)	吉田吉	吉田吉	吉澤	吉澤井野	中村	吉澤井野
桃田政史(鳥取)	吉田吉	吉田吉	吉田吉	吉澤	吉澤井野	長田	吉澤井野
上瀬英一(鳥取)	吉田吉	吉田吉	吉田吉	吉澤	吉澤井野	鶴見門	吉澤井野
(学歴) 江守大輔(大) 土岐)							
大澤直哉(甲陽学院)							
大西克彦(阪神)							
大西晴洋(天王寺)							
岡林秀史(高松)							
岡本 一(福岡南)							
小川 伸一(神戸大)							
小竹清介(青雲)							
越智健敏(小倉)							
小野隆一(法大附福山)							
今見一歩(金沢駿河)							
折坂茂樹(鳴尾)							

湯電会会費納入のお願い

陽春の候、会員各位には益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。本会の活動に変わらないご支援を頂き有難く存じております。

湯電会の活動も漸く軌道に乗って参りましたが、財政状況は依然として充分とは言えない状態にあります。

申し上げるまでもなく、本会の活動は全て会員各位からの会費に依存しております。本会の活動をより活発化する為に諸般の事情をぜひご理解賜り、何卒、平成6年度会費（3,000円）の早期納入（出来れば6月末までに）にご協力賜りますようお願いする次第であります。

また会費納入の便宜を計るため平成3年度からは会費の自動振込制度も採用しておりますので是非ご利用下さい。

なお卒業年度が昭和21年以前の方の会費は免除になっておりますので納入の必要はございません。また未納の過年度会費はご請求申し上げないことになっております。

湯電会会計幹事

事務局からのお願い

湯電会事務局へのお問い合わせ事項で目立ちますのは、「終身会員であるのに会費の請求をしてきた」ということです。これは、大阪大学工業会と湯電会とを混同しておられるためと思われますので、工業会と湯電会との関係について簡単にご説明いたします。

大阪大学工学部（その前身校を含む）には、学部全体の同窓会「大阪大学工業会」と学科または系の同窓会（たとえば電気系学科であれば「湯電会」）があります。したがって、湯電会の会員のうちほとんど全ての方は同時に大阪大学工業会の会員なのです。すなわち会員構成の面では湯電会は工業会の下部組織といえます。

ところが、工業会と湯電会とは財政的には全く独立しております、それぞれが独自に会費制度を設けております。したがいまして、工業会会費をすでにお払いになった方、あるいは工業会の終身会員の方からも、湯電会会費（年会費一律3,000円）を頂戴しております。また、湯電会では終身会員制は設けず、毎年会費をお納め頂いております。

会報や名簿の発行などを含め、湯電会の活動は全て会員各位からの会費に依存致しております。湯電会の健全財政確立のため、今後とも会費納入につきましてよろしくご協力の程お願い申し上げます。

なお、勤務先、住所の変更などにつきましては、工業会とは別途に、湯電会にもお知らせ下さいますよう切にお願い申し上げます。

会員登録

〒537-0083
大阪府守口市守口町2-20
湯電会事務室
TEL:06-6946-1140

発行 漣電会

〒565 吹田市山田丘 2-1
大阪大学工学部電気系内
06-877-5111(内線 4599)